

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

生者と死者の媒介者（ミディウム）： 現代のイギリスにおける霊媒と霊たちとの交流

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2025-04-25 キーワード: 心霊主義者教会 霊媒術 メンタル霊媒 感覚 死者の霊 作成者: 河西, 瑛里子 メールアドレス: 所属: 国立民族学博物館
URL	https://doi.org/10.15021/0002000284

生者と死者の媒介者^{ミデイウム}

—現代のイギリスにおける霊媒と霊たちとの交流—

河 西 瑛里子*

Mediating Those on Earth and Those in Spirit:
Interaction between Mediums and Spirits in the Contemporary UK

Eriko Kawanishi

本稿では、現代のイギリスにおける心霊主義の霊媒たちが、1) どのようにして死者の霊の存在を知覚していると考えているのか、2) 科学的にはありえないとされる霊の知覚という現象に携わっている自分をなぜ受け入れているのか、3) 超自然的存在との交流と知覚を実証的に扱う研究の中でどのように捉えられるのか、の3点を明らかにする。筆者のイギリスでのフィールドワークに基づけば、1) は、視覚や聴覚といった日常的な感覚により知覚しているが、直接ではなく、脳内や心の中で知覚することも少なくない。2) には、関心を同じくする仲間からの肯定、霊との交流は制御できるという理解、誰でもが霊媒になれるという言説が背景にある。3) は、瞑想と祈りという外部刺激のない状態において、霊媒は霊と互いに別の存在として相対している。彼らは意識や主体性を保ちながら、霊とも生きた人間とも同時に交流している、死者と生者をつなぐ媒介者だと理解できる。

This paper examines 1) how contemporary spiritualist mediums believe they perceive the spirits of the dead; 2) why they accept themselves as perceivers of the spirits, despite the scientific implausibility; and 3) how these mediums can be understood within empirical studies on interactions with and perceptions of supernatural beings. Based on my fieldwork in the United Kingdom conducted from 2022 to 2024, I found that: 1) mediums perceive spirits through ordinary senses, such as sight and hearing, but often describe these perceptions as occurring in the mind rather than through direct sensory

* 国立民族学博物館

Key Words : spiritualist church, mediumship, mental medium, senses, spirits of the dead

キーワード : 心霊主義者教会, 霊媒術, メンタル霊媒, 感覚, 死者の霊

experience; 2) their belief in their abilities is reinforced by affirmation from like-minded individuals, the notion that spirit interaction can be controlled, and a discourse promoting the idea that anyone can become a medium; and 3) instead of relying on external stimuli, they typically use meditation and prayer to interact with spirits, encountering them as separate entities. Mediums interact simultaneously with both spirits and living people, while maintaining consciousness and independence. In doing so, mediums serve as mediators between those on Earth and those in spirit.

1 序論	4.1.1 子供の頃から気づいていた
1.1 現代の心霊主義についての研究	4.1.2 大人になってから気づいた, なりたくなかった
1.2 超自然的存在の交流と知覚についての研究	4.1.3 親族内での遺伝
1.3 調査方法と本稿の構成	4.2 霊からの情報を受け取る訓練
2 イギリスの心霊主義の概要	4.2.1 オープンなサークル
2.1 20世紀半ばまでの歴史	4.2.2 クローズドなサークル, 集中講座
2.2 心霊主義者教会の団体とキリスト教	4.2.3 サークルの役割
2.3 心霊主義者教会の活動内容	4.3 霊との接触を制御
2.4 訪れる人々のプロフィール	4.3.1 切り替えと訓練
2.5 心霊主義が盛んな地域と階級	4.3.2 「憑依」という状態
2.6 霊媒の種類	4.4 霊の知覚
3 デモンストレーション	4.4.1 透視力
3.1 心霊主義者教会の様子	4.4.2 透聴力
3.2 デモンストレーション開始前	4.4.3 透感力
3.3 霊からの証拠とメッセージ	4.4.4 霊を知覚する能力
3.4 デモンストレーション終了後	5 結論
3.5 用いる言語	5.1 霊の知覚の仕方
3.6 霊媒への評価	5.2 霊を知覚する自分を受け入れられる背景
4 霊媒たちの語り	5.3 心霊主義の霊媒たちの位置づけ
4.1 霊媒になったきっかけ	5.4 残された課題

1 序論

イギリスでは大都市でも田舎町でも、津々浦々とまではいかないが、しばしば「心霊主義者教会 (Spiritualist Church)」が見つかる。「心霊主義 (Spiritualism)」とは、肉体の消滅後も¹⁾ 霊 (spirit) は存続し、生きている人々と交流できるという思想だ。このような思想を信じる人々が、定期的集まる場所の1つが心霊主義者教会である。

看板や掲示板はあるものの、この教会の建物は普通、一般住宅の中に紛れ、目立たない。言い換えれば、死者の霊と交流したい人々が定期的集まっている場が住宅街の中にあるのだ。それなのに、近所の人々から妨害行為を受けたという話はほとんど聞かない²⁾。しかも、心霊主義と関わりがない人であっても、たいへいはその名称と概要程度は知っており、社会に溶け込んでいる。

筆者が特に興味をもったのは、霊を知覚する方法だ。多くの人々は死者の霊を知覚することができない。そのため、「霊媒 (medium)」が間に立って、やり取りを行う。「死者の霊を知覚する」という行為は、現代科学に基づく合理的な説明ができないので、一般的にはありえない事象だとみなされる。それでは、なぜ霊媒たちは霊を知覚できると考えているのだろうか。

第2章では、歴史のほか、心霊主義者教会の団体や活動内容、訪れる人々の属性や霊媒の種類といった、心霊主義の概要を説明する。第3章では、心霊主義者教会における霊と霊媒と聴衆とのやり取りの事例を、参与観察をもとに描く。第4章では、霊媒たちへのインタビューに基づき、霊媒になったきっかけ、霊媒になるための訓練、霊との接触の制御、霊を知覚するときに用いている感覚について記述する。第5章では、総合的な分析として、霊媒たちの霊の知覚の仕方、霊を知覚する自分を受け入れられる背景、超自然的存在との交流と知覚の研究における霊媒たちの実践の位置づけ、の3点を検討する。

引用文や会話文の中の亀甲括弧〔 〕は、筆者による補足を示す。引用あるいは参照した文献のうち、著者名をカタカナや漢字で記したものの原著は日本語であり、アルファベットのものは英語である。本文中に記したインタビューや会話は全て英語で行われていて、引用の際には筆者が日本語に訳した。

なお、霊の実在を実験で証明しようとする心霊研究や超心理学という分野もあ

るが、本稿で取り扱うのは、霊の実在を前提として活動している霊媒たちとその実践である。

以下では、現代の心霊主義と超自然的存在との交流と知覚についての先行研究を見ていく。

1.1 現代の心霊主義についての研究

心霊主義に関しては、その歴史や思想の研究はよく行われてきたし (cf. オッペンハイム 1992; 津城 2005; 三浦 2008; モートン 2022; Braude 1989; Falcon 2023; Moore 1977), 実践者の自伝も数多く出版されている (cf. Barbanell 2020 (1959); Falcon 2023; Garrett 1939; Moore 1977; Roberts 2014; Smith 2014; Stockwell 2004)。その一方で、今でも実践が行われているにもかかわらず、実証的な研究は非常に少ない。

その少ない研究の大半は、イギリスの心霊主義を対象としている³⁾。例えば、社会学者の G. K. Nelson (1969) は組織のあり方やリーダーシップに着目しながら心霊主義の起源と発展について論じ、人々が心霊主義に関心をもつ最も一般的なきっかけは、近しい人の死だとしている (Nelson 1969: 267)。それに対して、同じく社会学者の J. Wallis は、友人との社交や「哲学」と呼ばれる講話も教会に通い続ける理由になっていると指摘する (Wallis 2001: 141)。

文化人類学者の V. Skultans (1974) は心霊主義がセラピーとしての機能をもつとともに、霊媒として活躍した女性たちは、それまで認められてこなかった、家庭外で人生を充実させる機会を得ていたことを明らかにした。心霊主義の霊媒と女性については 19 世紀の状況を歴史学者も研究しており (cf. Braude 1989; Falcon 2023), ジェンダーは心霊主義において取り上げられやすいトピックである。宗教学者で自らも霊媒である D. Wilson (2014) は、霊媒になる過程がシャーマニズムの徒弟制と類似していることを指摘している。

これらの研究では、心霊主義の社会的機能、及び霊媒の位置づけやあり方に着目している。それとは別に「霊がいる」という状況は霊媒と聴衆の協働が生み出しているというように、パフォーマンスに着目する研究もある。社会学者の R. Wooffitt は、霊媒を含む超常的な現象の実践者と聴衆のやり取りの会話分析を行い、両者がいかにその場を創り上げ、聴衆がその状況を受容するかを明らかにした (Wooffitt 2000, 2001; Wooffitt and Gilbert 2008)。本節で取り上げる先行研究のう

ち、唯一イギリスではなくオーストラリアで調査を行った文化人類学者の M. Tomlinson は、霊と霊媒とのやり取りはいつもうまくいくわけではないが、成功と判断される背景には、霊媒の自信に満ちた話し方や、その場にきた霊を霊媒と聴衆が協力して特定することにあると述べている (Tomlinson 2019; 2024)。

文化人類学者の J. Hunter はフィジカル霊媒の研究を通して、霊の存在について考察している (Hunter 2011; 2013; 2014)。多くの研究者や本稿が主に取り上げるメンタル霊媒とは異なり、フィジカル霊媒は霊媒以外の人々にもイメージや声などの形式で霊を知覚させることができる、とされている。Hunter はフィジカル霊媒のグループに参加して、自らも霊との交流を経験しながら調査をし、霊媒と霊とのやり取り (2.3 の「心霊主義者教会の活動内容」のうち、(1) デモンストレーションに当たる) は詐欺やトリックではなく、非身体的な人間を表現するための文化的に特定された技法とみなされるべきだ (Hunter 2013: 395)、という考えのもと、超常現象の分析を試みた。

霊媒と聴衆が協働して霊という存在や霊がいる場を生じさせているとするエティックな視点は、にわかには信じがたい現象をありうるかもしれない現象に転換してくれる。その一方で、そもそも当事者である霊媒たちが、このような現象が起こりうる理由を納得し、霊とのやり取りが可能だと信じていないと、こういった指摘は成立しないのではないか。そのため、霊媒たちがいかにして霊とやり取りをしていると考えているのかを、イーミックな視点から見ていく必要がある。

社会学者の H. Gilbert の博士論文は、この点に触れた数少ない研究である。彼女はイギリスの霊媒がどのように自らの霊体験を説明し、霊と積極的にコミュニケーションをとるようになったのかを明らかにした。彼女によれば、霊媒たちは霊と出会った当初は、その体験が霊媒としての能力によるとは考えておらず、熟達した霊媒からの検証を経て、霊媒としての自分を受け入れていく (Gilbert 2008: 333)。さらに彼女は霊と霊媒のコミュニケーションについても触れ、そこでは感覚の重要性を強調している。

[霊媒がどのように霊を体験するかは、] 一般的に5つの身体感覚に関連している。情報はしばしば印象やイメージとして伝えられ、多くの霊媒は、霊とのコミュニケーション中に、これらのイメージを意味あるものとして解釈しなければならないと言う。(Gilbert 2008: 334)

身体感覚を通して霊を知覚するという指摘はそれほど驚くことではない。その一方で Gilbert の主な関心は言語分析である。そのためか「5つの身体感覚」と述べつつも、「視覚」以外を分析の対象としていない。また現在では、五感のうち、触れることで得られる感覚には、触覚のほか、圧覚、温覚、冷覚、痛覚などがあるとされている。

以上のような心霊主義の研究を踏まえて、本稿ではイーミックな視点から霊媒と霊とのやり取りを明らかにし、その際、視覚以外の多様な感覚についても考察の対象とする。続いては心霊主義に限らず、超自然的存在との交流と知覚に関する研究のうち、本稿に関係する研究を見ていきたい。

1.2 超自然的存在の交流と知覚についての研究

心霊主義のような、通常の人には知覚できない存在と人との交流については、シャーマニズムや憑依の研究に多くの蓄積がある。

シャーマニズム研究と憑依研究の関係について、筆者の考えを述べておく。かつてシャーマニズムには、自分の魂（霊）を飛ばして異世界に赴き、超自然的存在と交流する脱魂型と、超自然的存在を自らに憑かせる憑依型があるとされていたが（エリアーデ 2004）、現在では両方を経験しているシャーマンも少なくないため、そういった分類はあまり意味をなさなくなったことが指摘されている（島村 2024: 6）。つまりシャーマニズム研究において、憑依は1つの要素だといえる。

その一方で、憑依を扱う研究者が皆、自らの対象をシャーマニズムとみなしているわけではない。特にアフリカやインド、東南アジアでの憑依研究者はシャーマニズムという言葉より、呪術や妖術という言葉を用いる傾向がある（cf. 石井 2007, 2017; 川田・白川・飯田編 2020）。つまりシャーマニズムは憑依を含むが、憑依は必ずしもシャーマニズムには含まれないといえる。しかしながら、本稿の文脈ではこの差異が重要とは考えづらいので、以下では憑依とシャーマニズム、両方の研究を取り扱いたい。

文化人類学者の石井美保は、「非西欧社会の呪術・宗教実践は、(中略)それとの対比や隠喩的結びつきを通して近代西欧なるものを措定するとともに、その影響力や問題点を明らかにするための参照点として位置づけられてきた」こと（石井 2017: 6）、「憑依に我を忘れるような非西欧社会の人間像は、近代西欧における

理性的で自律的な個人像のネガとして見いだされてきたこと」(石井 2017: 7) を指摘し、近代西欧を参照軸とせず、非西欧社会の憑依のような宗教実践を意味づけることが必要だとしている。裏を返せば、石井の指摘は、これまでの憑依の研究が非西欧社会の調査に基づいていたことを示唆している。

実際、文化人類学者の花渕馨也は、人類学において憑依という現象は、精神疾患や狂気、トランスや変性意識状態という逸脱行為、弱者の間接的な抵抗手段、他者としてふるまう演劇的パフォーマンス、不幸や災いの説明体系、外部の他者を模倣し、権力に抵抗する行為などとして捉えられてきたと述べているが(花渕 2005: 18-36)、これらの見方はいずれも非西欧社会での研究に基づいている。

また、宗教人類学者の佐々木宏幹は、エリアーデの研究を踏まえて、シャーマンの成巫過程には、超自然的存在がシャーマンになるよう求める召命型、親族内で継承される世襲型、修行して能力を身に着ける修行型の3つに分けられるとしたが(佐々木 1984: 20; 1992: 249-272)、この指摘も主にアジアにおける事例の検討に基づいている。

超自然的存在との交流に関する研究において、本稿で取り上げる近代西欧(イギリス)が対象となることはほとんどなかった。非西欧社会を対象としてきた、憑依やシャーマニズム研究から得られた知見は近代西欧にも当てはまるのか、検討したい。

もう1つ検討したい点は、超自然的存在の知覚と交流のあり方である。シャーマンがヴィジョンを見ることについて、認知科学の領域から迫ろうとしたのが、臨床心理学と文化人類学を専門とする R. Noll/R. ノル(1985; 2019)である。彼によれば、心の中で繰り返し意図的にイメージを創り出す訓練をすることで、より鮮明なイメージが見えるようになり、イメージを見ることの開始と終了を制御(control)、つまり自分で決められるようになる。さらに、どの文化にも心的イメージを創りやすい人とそうでない人がいる。

Noll に影響を受けた心理人類学者の T. M. Luhrmann は、イギリスやアメリカといった近代西欧に暮らす人々が超自然的な考え方や超自然的存在をいかにして受け入れているかを探っている。

Luhrmann(1989)はまず、イギリスの現代魔女術(ウイッカ)や儀式魔術に携わるのは、教養があり現代科学の知識ももつ合理的な人々であるはずなのに、彼

らが外部から見れば奇妙な信仰を受け入れて、自分たちの行動を説明するための説得力がある論理だと考えるようになるのはなぜか、ということに関心をもった。彼女によれば、それは魔女や魔術師に対して「解釈の漂流 (interpretive drift)」が生じているから、つまり出来事の間のパターンやつながり方がゆっくりと変化し、一見すると非合理的な解釈を彼らが受け入れるようになっていくからである⁴⁾。ただし、このような変化は、魔女や魔術師に限らず、新しい文化や社会に身を置くことになった人々の多くが経験しているだろう。

この研究を発展させた Luhrmann (2012) では、ヴィンヤードと呼ばれる、アメリカの福音主義のキリスト教に携わる人々を取り上げている。彼らは、日常的に神が存在しているかのように振る舞い、また体系化された祈りの練習を繰り返すことによって、神がいるという想像力を高め、神と交信していると確信していくようになる。祈りには、生まれつきの才能もあるが、練習によっても上達する。

これらの研究をさらに発展させた Luhrmann (2020) では、アメリカのペンテコステ系の人々にとって、身体感覚では捉えることができない神や霊が、いかにして現実的な存在になっていくのかという問題に取り組んだ。彼らにとって神や霊は、普通の物体のような現実の存在ではないが、全く非現実的な存在でもない。「内的感覚の開拓 (inner sense cultivation)」つまり内的な視覚の表現やその他の感覚の体験を意図的に繰り返すことで、知覚できるようになっていく。こちらも生得的な才能もあるが、育成、開発していくことも可能とされている。

Luhrmann は、魔女や魔術師は事実の結びつけ方の変化を通して、新たな解釈を受け入れていくと結論づけていたが、福音主義やペンテコステ系の人々が神や霊の存在を知覚していると考えようになるのは、体系化されたメソッドに基づき感覚を変容させ、新しい感覚を体得し、存在を認識していくからだとしている。彼女はこういった能力を生まれつき備えている人がいることを指摘してはいるが、後天的に獲得されていくプロセスをより重視しているといえる。

文化人類学者の L. Hume は『ポータル—感覚を通して別の現実への扉を開く』(2007, 原題は英語) の中で、シャーマンや僧侶、宗教の専門家、そして世俗の人々が、通常とは異なる意識状態になり、普通ではない (extraordinary) 体験をすることを、別の現実へのポータルを開くことと捉え、そのために様々な身体感覚を用いたテクニックが必要だとした⁵⁾。Noll (1985) は心的イメージという視覚

に焦点を当てていたが、Humeはそれ以外のあらゆる感覚も射程に入れようとしたのだ。そして、ポータルに移動するための引き金となるテクニックとして、「太鼓の音や詠唱や拍手などの反復音（音波駆動力）、踊りや揺れのようなリズムカルな動き、感情の高まり、集中力、活動への全面的な参加、特定の文化への没頭や知識」を挙げ、移動に必要な引き金の数は人によって異なるし、必要のない人もいるとしている（Hume 2007: 15-16）。

シャーマニズム研究ではしばしば、シャーマンが霊と交流できる状態になるためには、音や振動、リズムなどの外部刺激が必要だとされてきた（cf. 島村 2011, 2022, 2024; ハーナー 1989; 松平 2024; Harvey 1998）。また、宗教実践における感覚の役割の重要性が指摘され始めてきている⁶⁾。死者の霊と交信する心霊主義の霊媒の場合、死者の霊を知覚し、交流できる状態になるための引き金は、シャーマンたちと同じなのだろうか、異なるのだろうか。本稿では、霊媒が霊を知覚している自分を受け入れる背景と、彼らの感覚的な体験を明らかにすることで、あわせて検討していきたい。

1.3 調査方法と本稿の構成

本稿は文献調査のほか、イギリスで行った現地調査とオンラインを利用した調査に基づく。筆者が本格的に心霊主義の調査を開始したのは2022年7月である。アメリカ合衆国ニューヨーク州のリリーデイルという心霊主義者が集う集落で開かれた2日間のシンポジウムにオンラインで参加したのだ。続けて、イギリスの団体アーサー・フィンドレー・カレッジが主催する、2日間の初心者向けオンライン講座を受講した。なお、それまでも明確な研究目的はなかったが、2006年と2009年に心霊主義者教会を訪れて参与観察を行い、機会があれば霊媒と話をした。

同じ2022年9月から始めたイギリスでの現地調査は、2024年7月までに合計で約4か月間、主に南西部地方の最大都市ブリストルで実施した。ブリストルを選んだのは、心霊主義者教会が複数あったことに加えて、良心的な家賃で下宿させてくれる知人がいたためである。ここでは4軒ある心霊主義者教会に定期的に通った。

それ以外には、国内で一番多くの心霊主義者教会があるロンドンでも調査を実施し、心霊主義者教会の多様性と類似性の程度を調査した。活動を確認できたの

は 25 軒だったが⁷⁾、いずれの教会も特定の日時しか開いていないため、内 13 軒は外観のみの確認となっている。その他、知人たちの紹介を受け、エディンバラで 1 軒、ストーク・オン・トレントで 3 軒（内 1 軒は外観のみ確認）、サマーセット州とデヴォン州では合計 3 軒ずつ訪れた。いずれも可能な限り、霊媒やその場にいた人々と話をした。

さらに、霊媒術などの講座を開いている 4 つのセンター、つまりロンドンのサイキック研究カレッジ（The College of Psychic Studies）、スタンステッドのアーサー・フィンドレー・カレッジ（The Arthur Findlay College、以下 AFC）、エディンバラのアーサー・コナン・ドイル・センター（The Sir Arthur Conan Doyle Centre）とエディンバラ超心理学カレッジ（Edinburgh College of Parapsychology）を訪問した。

霊媒と 1 対 1 で行うプライベート・セッションは 3 回受け、許可を得て全て録音している。また、18 人の霊媒に半構造化インタビューを行い、霊媒ではないが心霊主義者教会に通う人々やかつて通っていた人々にもインタビューを実施した（半構造化インタビュー 1 人、非構造化インタビュー 5 人）。いずれも許可を得られた場合には録音した。

その他、有名な霊媒や調査で出会った霊媒の自伝、心霊主義の雑誌も参考にした。個人情報保護のため仮名を用い、個人情報の提示も分析に支障がない範囲で変更したり、控えたりしている。第 2～4 章に登場する主な霊媒や心霊主義者教会に通う人々のプロフィールは付記にまとめ、基本的には各章の初出で出身地か居住地を記した。なお、霊媒であり研究者でもある D. ウィルソンからは両方の立場からの話を伺ったこと、著書を刊行していることから、彼のみ本名を用い「博士」とつけている。その他の研究者のうち、筆者が直接話を伺った M. ボウマンのみ「教授」とつけ、区別している。

2 イギリスの心霊主義の概要

本章の 2.1 は文献調査、それ以外は主に現地調査に基づいている。イギリスの通貨ポンドは為替相場の振れ幅が大きいが、主な現地調査期間の 2022 年 9 月～2024 年 7 月の間は 160～200 円であった。

2.1 20世紀半ばまでの歴史

肉体が減んだ後も死者の霊と交流できるという信仰は、世界各地で見られるが、「心霊主義」と呼ばれる信仰の起源は、1848年のアメリカで起こった「ハイズヴィル事件」だとされる（Buckland 2004: 21–30; Nelson 1969: 3–7）。それ以前にも死後の世界の存在については議論されていたが、本稿の目的は思想史を追うことではないので割愛する。

1848年、ニューヨーク州の集落ハイズヴィルに暮らすフォックス家で、マギー（14歳）とケイト（11歳）という姉妹がたたくような音を耳にした。2人はやがてたたく音の数で、音を鳴らしていた男性の霊と交信できるようになった。彼は、自分はこの家の以前の住人に殺害された行商人だと姉妹に伝え、地下室を掘るように指示をする。すると、人間の髪の毛と骨が見つかり、この出来事は全米に広まった。

姉妹の年の離れた姉レアは結婚してすでに家を出ていたのだが、じきに彼女の差配により、マギーとケイトは霊媒として数多くの交霊会を催していくようになる。2人以外の霊媒も次々と登場し、アメリカで交霊会はブームとなっていく。当時は南北戦争（1861～1865）のため家族や友人を失ったアメリカ人が多く、死者との交流を求める人々が霊媒を求めたこともブームの背景にあった（モートン 2022: 132）。

19世紀半ば頃までには、蒸気船の改良が進んだことにより、アメリカとヨーロッパの間で定期航路が開設され、両大陸の行き来が容易になっていた。そのため、アメリカで誕生した霊媒たちもヨーロッパに渡り、交霊会を開くようになる。交霊会は見世物としての側面が強く、一儲けが期待できたのである。

あるアメリカの有名な霊媒によって、イギリスで初めての交霊会が開かれたのは1852年。これが興行的に成功したことで（Buckland 2004: 36）、その後も続けて霊媒たちが渡英し、イギリスでも交霊会は流行していく（オッペンハイム 1992: 29）。

ヨーロッパ各国の中でもイギリスで交霊会が人気となった理由を、モートンは2点挙げている（モートン 2022: 168）。1つは社会の諸問題について議論を行うために結成されたロンドン弁証法協会が、1871年に超自然現象を肯定する報告書を発表したことである。もう1つはフォックス姉妹の1人ケイトが渡英して交霊会

を開き、まもなく心霊主義者で弁護士の男性と結婚し、夫妻の自宅が心霊主義者たちの集会場所となったことである。

もちろん、霊媒たちには懐疑的な視線が向けられ、交霊会は調査された。その結果、多くがいかさまだと判明し、20世紀の初めには心霊主義は衰退してしまう（モートン 2022: 216）。

しかし、第一次世界大戦をきっかけに、イギリスでは心霊主義の人气が再び高まる（Nelson 1969: 155）。この戦争では亡くなった兵士の遺体が家族のもとに戻らなかったケースが多く、死を受け入れがたかった遺族が霊媒を必要とした。それだけでなく、兵士たちにも、たとえ死んでも残してきた家族と交信できるという安心感を与えた（モートン 2022: 221–224）。

第二次世界大戦後、霊媒行為の法的位置づけが変更される。1951年に魔女術令が廃止され、代わりに虚偽霊媒法が制定されたのである。何度か交付された魔女術令のうち、1735年制定のものは、あらゆる魔女術や魔術、呪文や占いは行うことも、そのふりをするこも、こうした行為によって誰かを騙したり搾取したりすることも禁止していた。つまり霊媒行為は全て営利目的の詐欺とみなされていた（Hartland 2020）。しかし新しい虚偽霊媒法では、詐欺目的でなければ霊媒術は違法ではなくなった（Buckland 2004: 38; Nelson 1969: 167）。それまでも死後の世界があるとする心霊主義という思想は合法だったが、戦後になって死者の霊とコミュニケーションをとる霊媒行為も処罰の対象ではなくなったのだ。

とはいっても、1772年以降、魔女術令が適用された例はなく、霊媒行為を行ったとしても、実際には罪に問われなかった。ところが、第二次世界大戦中、政府が隠していた海の事故を、ヘレン・ダンカンという霊媒が霊媒術で明らかにしてしまう。秘密裡に進めていたノルマンディ上陸作戦のことも話してしまうのではないかと恐れた政府は、ダンカンに有罪にできる法律として魔女術令に気づき、刑務所に拘置したとされる。戦争が終わり、社会が落ち着き始めてから、市井の声もあり、魔女術令は廃止された。

2.2 心霊主義者教会の団体とキリスト教

現在、霊媒が活動する場はいくつかある。メディアに登場する霊媒もいるし、サイキックショーという、各地のホテルなどで開かれる見世物的な催し物に呼ば

れる霊媒もいる。その多くは優秀な霊媒として名前を知られている。その他、自宅や電話、オンラインでプライベート・セッションを行ったり、サイキックフェアなどの催し物で、占い師やセラピストたちとブースを出したりする。

こういった活動は通常有料だが、料金の規定はなく、その金額は千差万別である。また、霊媒術に割く時間も霊媒ごとに大きく異なる。つまり十分な生活費を稼ぐ霊媒もいれば、副業にすぎない霊媒もいる。

霊媒術に関する集まりや催し物が定期的に行われる心霊主義者教会も、霊媒たちが活動する場である⁸⁾。各地に誕生していた心霊主義の団体は、19世紀末から「教会」と名乗り始めた(Buckland 2004: 40)。このことは、心霊主義という死後の世界を信じる思想が、死者の霊との交流という霊媒術を実践として取り入れ、宗教となったと理解できよう。

心霊主義者教会には、キリスト教との共通点がかなりみられる。イギリス国教会がローマ・カトリック教会より心霊主義に寛容な態度をとっていた(オープンハイム 1992: 114, 117; Buckland 2004: 40)という事情もあるが、心霊主義者教会は当初、メソジストやクウェーカーのように国教会とは異なる自由教会という位置づけであった⁹⁾。キリスト教の1つとみなされていたのである。

心霊主義者教会では、歌を「讃美歌(hymn)」と呼んだり、キリストやアーメンという言葉を目にしたたりする。十字架やキリストの姿を飾っている教会もあるし、教会堂の奥に壇上が設置されるなど造りも似ている。儀式の形式はプロテスタントに依拠しているし、歌集に収められた讃美歌や、霊媒が毎週異なる教会を訪れるという活動形態はメソジストに似ている(Wilson 2014: 1, 4, 41)。もともとメソジスト教会として造られた建物が、現在では心霊主義者教会として使われている場合もあるほどだ。

心霊主義者教会には、独立系教会と全国規模の団体に属している教会がある。イギリスで最大規模の心霊主義者教会の団体は、「心霊主義者全国協会(The Spiritualists' National Union, 略称 SNU)」である(写真1～4)。SNUは1901年に設立され、魔女術令廃止を後押しした。2024年9月時点で国内外に約300軒の教会をもち¹⁰⁾、1.3でも触れたAFCはSNUの教育機関である。

調査中、SNUに次いでよく耳にしたのが、1872年に設立された「全英心霊主義者協会(The Spiritualist Association of Great Britain, 略称 SAGB)」である(写真5～



写真1 ロンドン郊外のSNUの本部兼AFC



写真2 AFCの1週間単位でのワークショップが開かれる部屋の1つ

(共に2022年9月6日, エセックス州スタンステッド・マウントフィーチェット, 筆者撮影)



写真3 住宅街にあるSNU所属の教会



写真4 写真3の内部はメソジストの教会に似て簡素

(共に2023年8月14日, ブリストル, 筆者撮影)

6)。こちらはロンドンの本部以外に教会をもたないが、オンライン講座も含め活発に活動している。

その他、1931年設立の「より素晴らしき世界のキリスト教の心霊者リーグ (The Greater World Christian Spiritualist League, 略称 GWCSL)」は17軒、1996年設立と比較的新しい「合同心霊主義の一門 (The United Spiritual Fellowship, 略称 US)」は13軒の教会をイギリス各地にもつ。

各団体間の大きな違いの1つは、キリスト教との距離感である。SNUはキリスト教と距離を置くが、逆にGWCSLはキリスト教色の強い団体として設立されたため、キリスト教的とされる (Buckland 2004: 40)。といっても、SNUの教会でも讃美歌を hymn と呼ぶなど、キリスト教の要素もみられた。一方のSAGBは内部に十字架もキリストの絵もなく、SNUよりもキリスト教と距離を取っているようだ。US所属のある教会には十字架やキリストらしき人物が描かれたステンドグラ



写真5 ロンドン中心部にある SAGB の本部 (2022 年 9 月 25 日, ロンドン, 筆者撮影)



写真6 肖像画などがかかる SAGB の教会堂 (2023 年 8 月 3 日, ロンドン, 筆者撮影)

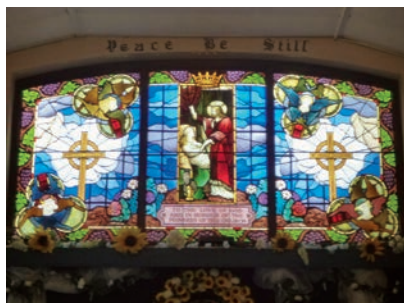


写真7 教会堂上部のステンドグラスに描かれたキリストと十字架



写真8 手前の棚ではタロットやウィジャボードを販売, チベット仏教の旗も奥に飾られている

(共に 2023 年 8 月 2 日, ロンドン, 筆者撮影)

スがあり, キリスト教らしさを感じさせる一方で, キリスト教では禁止しているタロットやウィジャボード¹¹⁾など占いに使う道具を販売しており, 柔軟さを感じた(写真7~8)。

独立系教会の中には, 初めから独立していた教会もあるが, ヒーリングに関する決まりや十字架やキリストのイメージの撤去など, 規則と規制が年々厳しくなっていく SNU に嫌気がさし, 独立した教会もある。そのため, キリスト教色が非常に強いところもあったし, 逆に宗教性を感じさせないところもあった。

現在でもキリスト教色の強い教会もあるが, どちらかというとき霊主義は脱キリスト教的な方向に進んでいる。その理由の1つに, キリスト教的な心霊主義者教会 GWCSL の減少が挙げられる。この教会は1935年には580軒あったが(Nelson

1969: 285), 現在では先述のように 17 軒である。脱キリスト教化を進める SNU が同じ 1935 年に 501 軒だったが (Nelson 1969: 285), 現在では約 300 軒であることと比べると, GWCSL の減少幅は大きい。1960 年代以降, イギリスではキリスト教の影響力が減退しており (Falcon 2023: 268), 心霊主義でも同様のことが起きていると考えられる。脱キリスト教化が進む一方で, 東洋の瞑想のテクニックを取り入れるようになってきているという指摘もある (Wilson 2014: 42)。私が訪れた心霊主義者教会の中にも, ネイティブ・アメリカンの絵や置物が並ぶ教会 (写真 9), 瞑想のときにシンギングボウルと呼ばれるネパールの楽器を用いている教会 (写真 10), チベット仏教の五色の旗を飾っている教会があった。このような非西洋文化との混交は, 1960 年代後半にアメリカで始まった, カウンター・カルチャー運動の影響が大きいと考えられる。

その影響は教会に限らない。例えば 1932 年に刊行された心霊主義の老舗雑誌 *Psychic News* でも, 1981 年の編集長の交代後, 読者を増やそうと, ニューエイジや代替セラピーといったカウンター・カルチャー運動に関連した記事を増やす変革を行っている (Harris n.d.)。



写真 9 ネイティブ・アメリカンの絵や置物が並ぶ独立系教会 (2023 年 8 月 6 日, ブリストル, 筆者撮影)



写真 10 SNU 所属の教会で用いられた, 十字架, シンギングボウル, ネイティブ・アメリカン由来と考えられる羽 (2024 年 5 月 13 日, ロンドン, 筆者撮影)

ロンドンで活動が確認できた 25 軒のうち、SNU 所属が 13 軒と最も多く、SAGB、GWCSL、US はそれぞれ 1 軒ずつだった。独立系と思われる教会は 9 軒だった。ブリストルでは 4 軒のうち、SNU と独立系が 2 軒ずつ、ストーク・オン・トレントでは 3 軒のうち、2 軒が SNU、1 軒が独立系だった。つまり現在では、SNU 所属と独立系の教会がイギリスの心霊主義者教会の大半を占めている。

2.3 心霊主義者教会の活動内容

前節では心霊主義団体の多様性について述べた。しかし、教会内の内装や用語に違いがみられることはあっても、活動に大きな違いはみられない。

教会の運営は代表者と数人の理事たちが担っている。たいていは霊媒である彼らは、他に仕事をもっていたり、年金で生活したりしていて、心霊主義者教会にはボランティアとして携わっている。そのため、休暇や健康問題を理由に、集まりが急遽中止になることもあるし、引き継ぐ人がいないと閉鎖されたりもする。逆に、生活に余裕ができたところで、新しく教会を始める霊媒もいる。

ブリストルとロンドンでの調査から、心霊主義者教会では、(1) デモンストレーション、(2) サービス、(3) ヒーリング、(4) サークルの 4 つの活動を主に行っていることが分かった。これまでに調査を行った活動と地域は表 1 の通りである。

(2) のサービスは大半の教会で実施されていた。しかし、それ以外の (1) (3) (4) は実施していない教会もあったし、参加人数や担当者の都合により、実施を始めたり、取りやめたりするなど流動的だった。

(1) デモンストレーション (別名: Mediumship, Demonstration of mediumship, Guild, Clairvoyance) : 約 1 時間

名称は様々だが、ゲストの霊媒が集まった人々を前に壇上に立ち、死者の霊と交信をするイベント (写真 11)。料金は 3 ~ 5¹²⁾ ポンドほどで、教会の維持費に使われる。毎回、異なる霊媒をゲストとして招いており、普通「お車代」として 30 ポンド程度を支払う。しかし報酬を渡すことはなく、心霊主義者教会での霊媒行為はボランティアである。ロンドンでは平日の夜に行うところが多く、仕事帰りと思われる中高年層がよく参加していた。一方で、ブリストルの 1 つの教会のように、平日の昼間に実施しているところもある。その場合、夜に家を空けるこ

表1 筆者の調査概要 (2006年7月, 2009年3月, 2022年7月~2024年6月)

	(1) デモンスト レーション	(2) サービス	(3) ヒーリング	(4) サークル	その他		合計
					ワークショップ	講座	
ロンドン	7	6 (1)	6	6	1		26
エセックス州スタンステッド・ マウントフィーチャット						2(1)	2
エディンバラ	2		1				3
ストーク・オン・トレント		1	1		2		4
ブリストル	7(3)	13	5	8			33
バース	1		2				3
サマーセット州トートン		1	1				2
サマーセット州グラストンベリー		1					1
デヴォン州ビデフォード		1					1
合計	17	23	16	14	3	2	75

※()内の数は、オンラインで参加した活動の数。

※ブリストルでのデモンストレーションのうち、1回は定期の活動ではなく、遠方に住む霊媒を招いての特別イベントだった。

※バースは2006年7月、トートンは2009年3月、それ以外は2022年9月以降。



写真 11 独立系教会のデモンストレーション開始直前、壇上の霊媒と向き合う形で、聴衆は椅子に座っている (2022年9月11日, ブリストル, 筆者撮影)

とが難しいと思われる、高齢女性の参加が目立っていた。

(2) サービス (別名: Divine service): 1.5 ~ 2 時間

前半にキリスト教の日曜礼拝に似た儀式が行われた後、後半に (1) と同じ、ゲストの霊媒によるデモンストレーションが行われる。宗教的儀式であるためか、

参加費は不要で寄付金のみである。ほとんどが日曜日に実施していたが、ロンドンの1軒は水曜日に実施していた。また、ロンドンの独立系の2軒はサービスを行わず、平日のデモンストレーションのみだった。キリスト教とは距離を置きたい、日曜日はゆっくり休みたい、サービスが集中する日曜だと評判の良い霊媒を招待しにくい、といったことが理由だと考えられる。

前半の礼拝では、祈ったり、歌ったり、ヒーリングを行ったりする。これらの点はキリスト教のサービスと共通しているが、聖書に基づく牧師の話の代わりに「哲学」、つまり霊との対話や心霊主義の書籍などに触発された霊媒自身の体験に基づく講話が行われる。

司会や霊媒が唱える始めの祈りや終わりの祈りのほか、イエスが弟子たちに直接教えたとされる「主の祈り (The Lord's Prayer)」が、ほとんどの教会で一度は唱えられていた。

「アメージング・グレイス」など、一般的に広く知られた讃美歌のほか、多くの心霊主義者教会では「ヒーリングの讃美歌」が歌われていた。気分が高揚する歌、認知度が高い歌として、「アイ・ハヴ・ア・ドリーム」(ABBA)、「スイート・キャロライン」(ニール・ダイヤモンド)、「トライ・エヴリシング」(シャキーラ、ディズニー映画『ズートピア』の主題歌)といったポップソングを歌ったこともあった。

(3) ヒーリング (別名: Spiritual healing) : 1 ~ 3.5 時間

ヒーリング¹³⁾とは、神や宇宙といった高次の存在から受け取った「エネルギー」を必要としている人に送ることにより、何らかの改善を期待する代替療法の1つであり、エネルギーの媒介者は「ヒーラー」と呼ばれる(河西 2023a 参照)。(2)のサービス中にも、体調の悪い人の名前を挙げ、その場にいる全員が心の中で彼らにエネルギーを送ることが行われる。それ以外にも、椅子に座ったり、簡易ベッドに横たわったりしながら、15 ~ 20分程度、頭や肩などの身体に触れて、エネルギーを注ぐハンズオン・ヒーリングの時間を設けている心霊主義者教会がほとんどだ。4 ~ 5ポンドを求める教会もあるが、寄付金だけの教会もある。ヒーラーはその教会に所属していることが多く、毎回メンバーはほぼ固定している。デモンストレーションと同様、ヒーラーも無報酬であり、交通費も支払われない。

(4) サークル (Open circle, Awareness circle, Open development circle, Meditation circle) :

1.5 ～ 2 時間

直感力を高めたり、霊媒になるための訓練を行ったりする集まりで、すでに霊媒として活動している人が主催している。個人宅のほか、心霊主義者教会に所属する霊媒は教会で開くこともあり、その場合、デモンストレーションやヒーリングと同様、教会の維持費のため、2～4ポンドを支払う。

サークルには誰もが来られるオープンなもの、招待された人だけが参加できるクローズドなものがあり、後者は主催者の自宅で開かれることが多い。オープンなサークルに通っているうちに能力がある、準備ができたとみなされたら、主催者からクローズドなサークルに招待される。オープンなサークルは「気づきのサークル (Awareness circle)」、クローズドなサークルは「開発サークル (Development circle)」と呼ばれるが、最近では厳密な区別をしないサークルも出てきている。

サークルの継続年数は様々である。複数のメンバーが遅刻と欠席を繰り返すことに嫌気がさした主催者が1年も経たず、やめてしまったサークルがある一方で、メンバー間の人間関係が良好で、20年以上続いているサークルもある。

近隣に住む人々が集まって、霊媒としての能力を磨く取り組みは、1860年代に始まった (Nelson 1969: 95–97)。当時、霊媒術への関心が高まっていたにもかかわらず、教えられる霊媒が非常に少なく、ある著名な霊媒が各自の自宅でこのような取り組みをすることを推進した結果である。心霊主義者教会は住宅街にあると冒頭で述べたが、それはこういった自宅でのサークルが心霊主義者教会へと発展したケースが多いからだ、D. ウィルソン博士から聞いた。

現在では、スタンステッドのAFC、エディンバラのアーサー・コナン・ドイル・センターやエディンバラ超心理学カレッジといった、霊媒術を教える講座を開設している機関がいくつも出てきている。こうした講座は、週末ごとに数か月間、あるいは1週間の集中プログラムとして、期間を区切って行われる。オンラインでも実施されている、料金はかなり高額であるため、霊媒たちは普段は地元のサークルに参加し、金銭的余裕があれば時折このような講座を受講して、スキルを高めている。2020年3月23日以降、COVID-19に起因するロックダウンが繰り返し発出されるようになったことをきっかけに、オンラインで実施されるサークルも出てきた。霊媒の訓練のあり方も多様化している。

その他、教会内でプライベート・セッションを定期的に行っているところもあるし、一般の人々に心霊主義者教会を知ってもらうためのオープンデーやバザーなどのイベントを年に数回、行っているところもある。ゲストを招き、講演会やワークショップを開催しているところもある。

こういった情報は、ウェブサイトやソーシャルメディア、教会前の掲示板に掲載されているが、それぞれの情報が食い違っていることもあった。先述のようにロンドンには教会数が多く、全ての教会を内部まで訪れることはできなかった。そこで、全てを自分で確認できた、ブリストルの教会の活動状況を表2にまとめた。

ベッドminster心霊主義者教会 (Bedminster Spiritualist Church) は、(1)～(4)の全てを実施しているが、全てに定期的に来る人はいない。(3)と(4)は教会の代表者が主催し、(1)と(2)にはそれぞれ責任者がいる。ウェストベリー・パーク心霊主義者教会 (Westbury Park Spiritualist Church) は日曜に2回、サービスを実施している。これはかなり珍しいが、私が観察した限り、両方に参加する人はいなかった。ノウル心霊主義者教会 (Knowle Spiritualist Church) は場所を借りているため、同日に(2)と(3)を実施していると考えられる。

友達サークル心霊主義者グループ (The circle of friends Spiritualist group) を主催するエリスは、ブリストル地域ではその有能さと人柄の良さで非常に知られた霊媒で、アメリカで活動することもある。彼女は夫が所有する自動車修理工場の一角で、こういった集まりのほか、プライベート・セッションを行っている。

表2 ブリストルの教会の活動状況 (2024年5月～6月)

団体	名称	建物	(1) デモンストレーション	(2) ヒーリング	(3) サービス	(4) サークル
SNU	ベッドminster心霊主義者教会	自前	火 2:15-3:30pm	木 7-8pm	日 6:30-8pm (1 & 3 週目)	金 11am-12pm
SNU	ウェストベリー・パーク心霊主義者教会	自前	なし	日 8pm 水 2-3:30pm	日 11am & 6:30pm	水 7:30pm
独立系	ノウル心霊主義者教会 ¹⁴⁾	公民館を賃借	なし	サービスの後	日 6:30-8pm	なし
独立系 ¹⁵⁾	友達サークル心霊主義者グループ	家族所有の建物の一角	火 7pm (Zoom)	なし	日 6:30pm (偶数月1週目)	木 7pm (1 & 3 週目)

エリスが2か月に一度行っていたサービスは、私が参加した2024年6月をもって終了した。参加費は3ポンドだったが、ロックダウンを機に参加者が激減してしまい、その結果、霊媒に支払う交通費30ポンドを賄えず、毎回エリスの持ち出しとなっていたからだ。

実はCOVID-19によるロックダウン中、サービスをオンライン中継する教会が増え、解除後も以前のような人数が戻ってこない、という話はどこの教会でも耳にした。そのうえ、ウクライナ戦争により光熱費が急激に高騰したことにより、教会の建物の維持が厳しくなっている、という悩みもよく聞いた。私が2006年に訪れたバースの心霊主義者教会は2軒ともロックダウン中に閉鎖され、そのまま再開することはなかった。

心霊主義者を自認する人の数や心霊主義者教会の数は、パンデミックの際、急速に減少したわけではなく、第二次世界大戦後から続いているようだ。歴史学者のK. Falconは、第二次世界大戦での身元不明埋葬者数と行方不明者数、及び両者を合わせた数の全死者数に対する割合は、第一次世界大戦時より少なかったこと、精神医学が発達し、遺族のトラウマ解決の助けとなったことを、その理由に挙げている(Falcon 2023: 267–268)。つまり霊媒を必要とした人が減ったうえ、霊媒術以外にも死と向き合う手段が登場し、浸透していったのである。イギリスは第二次世界大戦後も、フォークランド紛争、アフガニスタン紛争、イラク戦争などに軍隊を派遣しているが、そのときにも心霊主義の復興は起こらなかったのである。

例えば、1944～1964年にかけてSNUの教会数は400～498軒であったが(Nelson 1969: 286)、先述のように2024年時点では約300軒である。また、直近のみのデータになるが、国勢調査¹⁶⁾で「心霊主義」と記入した人は、2011年には39,061人だったが、2021年には32,898人と10年間で6,000人近く減少している(Office for National Statistics 2012; 2022b)。

しかし、宗教社会学者のG. Davie (1994)が主張するように、教会という組織に所属せず、信仰をもつ人が増えていることを考えれば、心霊主義者教会や心霊主義者の数が減ったからといって、霊媒術への関心も低下しているとはいえない。1951年以前、霊媒行為は実質的に有罪にはならずとも違法という状態が続いていた。一方で、魔女術令の廃止により、虚偽でない霊媒行為は合法とされたため、現在では心霊主義者教会に行かなくても、プライベート・セッションなどの形

で霊媒術と関わることは容易になっているはずである。それは、ニューエイジやオルタナティブ・スピリチュアリティの雑誌に掲載されている霊媒の広告や、AFCなどの専門の教育機関で講座やワークショップが開かれ続けていることにも表れている。

日曜のサービスを終了したエリスは、私を下宿先に送り届ける車の中でこう話してくれた。

COVID が終わってから、人が来なくなってしまい、[来てくれる] 霊媒にお金を払うのが大変になって。昔は24人も来て、部屋がいっぱいになって、私が台所の椅子に座る羽目になったこともあったのに。今日なんて5人。Zoom なら来てくれる人たちからお金もらわなくて済むし、霊媒に交通費も払わなくていいでしょ。火曜の Zoom [の集まり] はとても人気だから、こちらに移行することにした。時代が変わったよね。(2024年6月2日, ブリストル)

彼女はこう語るが、実は同じ場所で週5回1日1〜3回開いているプライベート・セッションは、宣伝もしていないのに数か月先まで予約が埋まるほど大人気なのである。私が2023年8月にお願いしたときも、翌年1月まで埋まっていたほどだ(日本から来たということ、本来は仕事をしないと決めている日曜日に特別に行っていた)。)

心霊主義者教会という組織において、霊媒術と関わりようとする人は減っているかもしれないが、それがすなわち霊媒術への関心の低下だとは言えない。しかし、個人で霊媒術に関わる人たちの実態はつかみにくい。そのため本稿では、定期的に心霊主義者が集まってくる心霊主義者教会を主な調査対象とした。

2.4 訪れる人々のプロフィール

それでは心霊主義者教会にはどのような人がやってきているのだろうか。

心霊主義を自らの信仰と考える信者は、教会の運営に携わったり、定期的に通ったりしている。こういった人たちの中には、自らが霊媒やヒーラーである人も少なからずいるし、既定の料金を払ってその教会のメンバーとなり、バザーなど教会の資金集めのイベントに積極的に参加するなど、教会の運営を経済的に助けて

いる人もいる。その一方で、信者ではないが、心霊主義に関心があり時々やってくる人、知り合いなど特定の霊媒が来るときには行く人、ヒーリングにだけやってくる人など、ライトな関わり方をしている人もいる。

年齢層は中高年以上が多いが、どの年齢層からも来ている。成人している親子、未成年の子を連れた親や祖父母、友人同士の若者なども参加している。性別では女性が多く、私の参与観察によると7～8割を占めている。また、LGBTQの人は、確認した限りでは見当たらなかった。

エスニシティには偏りがあり、私の参与観察では白人が9割近くを占めている。イギリス人が最も多いが、多様な民族が暮らすロンドンでは東欧出身の人々にもしばしば出会ったし、ラテンアメリカ系の人々も少しは見かけた。ブリストルやストーク・オン・トレントでも、カリブ・アフリカ系の人々は時折見かけた。ロンドンのある教会は、代表がカリブ系女性ミュージシャンで、白人が多かったものの他の教会よりカリブ・アフリカ系の人々が多く、カリブ音楽を流していた。逆にほとんど見なかったのがアジア系である。イギリスに多い南アジア系の人々でさえ、地域に関わらず、全くといっていいほど出会わなかった。心霊主義はキリスト教的な要素が強いので、キリスト教をバックグラウンドにもつ人々にはなじみやすいことが可能性として考えられる。アジア系の人々は、ヒンドゥー教やイスラームなど、出身地域の宗教の施設に集っていると思われる。

通う教会は、自宅からの距離と教会の雰囲気を考慮して選ばれている。まず距離だが、私の調査に基づけば、「それほど遠くない」ところに通う人が多い。どれぐらいの距離を「それほど遠くない」と感じるかは、都会暮らしか田舎暮らしか、自家用車を持ち運転できるかなど、個人や状況によって大きく異なるが、自動車ですら10～20分程度が許容範囲のようだ。

例えば、2022年のグラストンベリー滞在時の下宿先の大家のイザベルは、以前暮らしていた都市では熱心に心霊主義者教会に通っていた。しかし、グラストンベリーに引っ越してきてからは、他のことに熱中し始めたせいもあるが、近くに心霊主義者教会がなく、通うのをやめてしまった。私がブリストルの心霊主義者教会の調査をしていることを知ると、雰囲気などの詳細を尋ね、「絶対に訪れる」と話していたが、1年後に再会したときにはまだ行っていなかった。「車で1時間は遠い…」と言い、訪問を躊躇した要因の少なくとも1つは距離だったことが窺

えた。

しかし、距離だけで通う教会を決めるわけでもない。ロンドン郊外の心霊主義者教会に通うポールは、もともとロンドン中心部に暮らし、中心部の心霊主義者教会に通っていた。しかし引っ越した先の郊外からこの教会までは、時間帯によってはバスで1時間近くかかる。一方新しい自宅の周辺には複数の教会があり、彼はバスで約30分の距離にある教会に通い始めた。しかし、運営を担っていた代表者が亡くなると、閉鎖されたため、別の教会に移った。新しく通い始めた教会まではバスで約15分である。この教会も気に入ってはいるが、前の教会の方が良かったと、ポールは懐かしそうに思い出話をしてくれた。つまり、通える範囲に複数の教会がある場合には、距離だけではなく、教会の雰囲気も選ぶ際の基準となっている様子が窺えた。

心霊主義者教会にやってくるきっかけとしては、配偶者や子供、親など、親しい誰かを亡くした喪失体験が圧倒的に多い、とインタビューをした霊媒たちは語る。確かに友人たちの紹介により、話を伺うことができた、エディンバラに暮らす70代のハロルドもそうだった。10年ほど前、妻が60代で亡くなった。非常に仲が良かった妻の死にかなりのショックを受け、ウェブサイトで見つけた、ある心霊主義者教会に通い始めた。そこで教会の理事である霊媒たちが親身に話を聴いてくれたことが、立ち直りの大きな手助けになった。今ではショックはだいぶ和らいだが、教会で親しくなった人々と話ができるという理由で、現在でも同じ教会に通い続けている。

身体や精神の不調をきっかけに通い始める人もいる。ストーク・オン・トレントで出会った80代の女性¹⁷⁾は、子供の頃から霊を見る経験をしており、心霊主義者教会に興味をもっていた。しかし育ててくれた祖母はこのような事柄に否定的だったため、正しくないことだと思いつんでおり、恐怖心から行くことができないでいた。結婚後、精神的な不調に陥ったとき、心霊主義者教会で結婚式を挙げた人と知り合い、その人に連れていってもらい、通うようになった。

限られた調査期間の中では、教会にやってくる人々からトラウマ的な体験を伺うことは難しかったが、教会内で耳にした会話から、2人と同様の傾向は窺えた。

2.5 心霊主義が盛んな地域と階級

イギリスは階級社会だといわれるが、それぞれの階級の定義づけがないため、何を基準に見分けるかは難しい。イギリス人に基準について尋ねてみても、「簡単じゃないね。アクセント、学位の有無、仕事とかかなあ…」と言う人もいるし、「今は移民も増えているし、〔第二次世界大〕戦後になって階級が違う人同士での結婚も増えたとし、違いはなくなってきている」と言う人もいる（70代の彼女の父親は労働者階級、母親は上流階級の出身）。それでも、心霊主義者教会に通う人たちの階級を、参与観察とインタビューに基づいて、あえて考えてみたい。

会話で使用される英単語¹⁸⁾、アクセント、学歴、職業から判断すると、労働者階級の人が多い。例えばブリストルの場合、非常に強いブリストル・アクセントの英語を話す人が多いが、ブリストルの中流階級の人にはアクセントの強い英語を話さない。また、日本の高校にあたる学校を出た段階では大学に進学せず、就職し、若いうちに結婚して子供をもつ人が目立っていた（その後、リスクリングのため大学に通う人が多いが、これはイギリスの一般的な特徴でもある）。さらに、職業は専業主婦のほか、スーパーのレジ業務といった非専門職や、美容師、看護師や介護職、消防士やトラック運転手などの肉体労働、あるいは社会的地位が高くない職種に就いている人が多く、仕事を転々としている人もいた。ただし、ロンドン郊外の中流階級が多く暮らしている地域には、中流階級とみられる人々を中心とした心霊主義者教会もあり、教会が多数あるロンドンでは教会によって階級の住み分けがなされているようだ。

前節で取り上げたポールは中流階級の出身で、かつて大学の研究所に勤めていたのだが、階級に関する私の見解に同意してくれた。そして現在、通っている教会は労働者階級の人が多いが、以前通っていた教会は中流階級の人が多かったと語り、そのことがかつての教会に居心地の良さを感じていた理由の1つだった様子が窺えた。

ある教会のサークルに参加した際、「昔は貴族とか裕福な人も、心霊主義によく来ていたよね」という発言を耳にした。すると、その場にいた私を除く5人全員が賛同し、通う人々の階級が変化しつつあるという結論に至っていた。

彼らの語りと部分的に関連する記述がある。社会学者の G. K. Nelson が 1972 年

に発表した論文によると、SNUのメンバーのうち、上位中流階級が9%、中流階級が36%、下位中流階級が18%、労働者階級が29%、その他が8%であった(Nelson 1972: 173)。この数字の情報源は1969年9月29日の*London Times*に掲載された「Mar-Plan Survey」である。「Mar-Plan Survey」がどのような方法で調査を行ったのかは、Nelsonの論文からはわからなかったが、中流階級とみられる人々、あるいは自らをそうみなす人々が、この時点でSNUにかなりいたことは確かなようだ。

私がこれまでに会った中流階級の友人たちに心霊主義者教会の話をする、訪れたことがある人でも居心地が悪く、継続して通うことはなかったと語ったり、霊媒術そのものを疑いの目で見たりする傾向があった。逆に労働者階級の友人たちの場合、訪れたことがある人は教会に対して好意的な傾向にあり、継続して通っていた経験をもつ人も少なからずいた。つまり、現在の心霊主義者教会は労働者階級の人々を中心とした場所になっている。なぜなのだろうか。

ポールは「多分、一部の霊媒が占いをやっていて、それを中流階級の人は嫌ったからではないか。心霊主義では未来は言うべきではないとされているから。でも労働者階級の人は気にしなかったんじゃないか」と語った。中流階級が占いを嫌うわけではないが、心霊主義の一環として行うことを好まないということだ。彼の発言の裏づけはないが、心霊主義のそもそもの目的は、死後の世界の实在の証明だったことを思い出すと、確かに占いは心霊主義とは関係がない。

それ以外に、中流階級の人々の関心が、ニューエイジやオルタナティブ・スピリチュアリティに移っていった可能性を挙げたい。これらが盛んになりだしたのは、Nelsonの論文にあった調査が出た少し後の1970年頃である。そのうえ、霊と交信できる「チャネラー」がいてヒーリングも盛んであるなど、心霊主義とニューエイジやオルタナティブ・スピリチュアリティには似ている実践もある。私は最近までこれらを調査していたのだが、携わる人々は主に中流階級だった(河西 2015)。

こうした緩やかな住み分けは費用面にも表れている。ニューエイジやオルタナティブ・スピリチュアリティの毎週の集まりでは、2024年の時点で10ポンド以上の費用がかかり、それなりの収入がないと参加は厳しい。それに比べて、心霊主義のサークルは数ポンドで済む。ただし、ニューエイジやオルタナティブ・ス

ピリチュアリティは個人主義的な実践であり、携わる人々の数や実態は把握しづらく、この推測を実証することは難しい。

最後に心霊主義が盛んな地域と階級の関係を指摘しておきたい。本節では、かつては中流階級も多かったと記述したが、今でも一般的には、心霊主義に携わるのは上流階級や中流階級の人々だと受け取られている。それは夫アルバート公に先立たれたヴィクトリア女王やアルフレッド・ラッセル・ウォレスのような科学者、アーサー・コナン・ドイルのような知識人や上流階級出身のウィンストン・チャーチル元首相などが関心をもっていたことで知られているからである。しかし、19世紀の労働改革者ロバート・デイル・オーウェンが信奉者だったことで、労働者階級にも広がっていたのである（モートン 2022: 169）。このことは、心霊主義の盛んな地域と工業化が進展した地域が一致することに表れている。

19世紀のイギリス史を専門とする歴史学者のJ. オッペンハイムは、1850年代以降、心霊主義が盛んになったのは、ロンドンを除けば、工業地帯であるミッドランド、ヨークシャー、ランカシャーだったことを指摘している（オッペンハイム 1992: 126）。また Nelson は、彼が調査を行った1960年代の時点で心霊主義が発展しているのは、経済が好調で工業化が進むロンドンと西ミッドランド地方だけだと述べている（Nelson 1969: 192）。工業化が進んだ地域には多くの工場が立つ。そこで働く労働者たちの間で、心霊主義が広がっていたとされている。

宗教学者の M. ボウマン教授は2015年、西ミッドランド地方の街ストーク・オン・トレントの博物館で行われた心霊主義の展示プロジェクトに関わった（写真12）。ストーク・オン・トレントは、世界的な陶磁器メーカーのウェッジウッドの本社があるなど陶磁器で有名だが、心霊主義が盛んで現在でも3軒の教会が活動している¹⁹⁾。

この街では1891～1997年の間に32か所の住所が心霊主義者教会に登録されていたが（図1）、そのうち28か所が1969年以前までに登録されている（Talking with the dead 2015）。この町の人口は1910年で208,872人、1958年で272,000人、2021年で258,400人とあまり変化していないが²⁰⁾、工場労働者が今より多かった20世紀前半～半ばの方が、心霊主義者教会の活動も活発だった。それは彼らが心霊主義者教会の主な担い手だったからだとして、ボウマン教授は指摘している²¹⁾。



写真 12 ストーク・オン・トレントの心霊主義者教会内で見つけた、展示に使われたパネルの1つ (2024年5月, ストーク・オン・トレント, 筆者撮影)

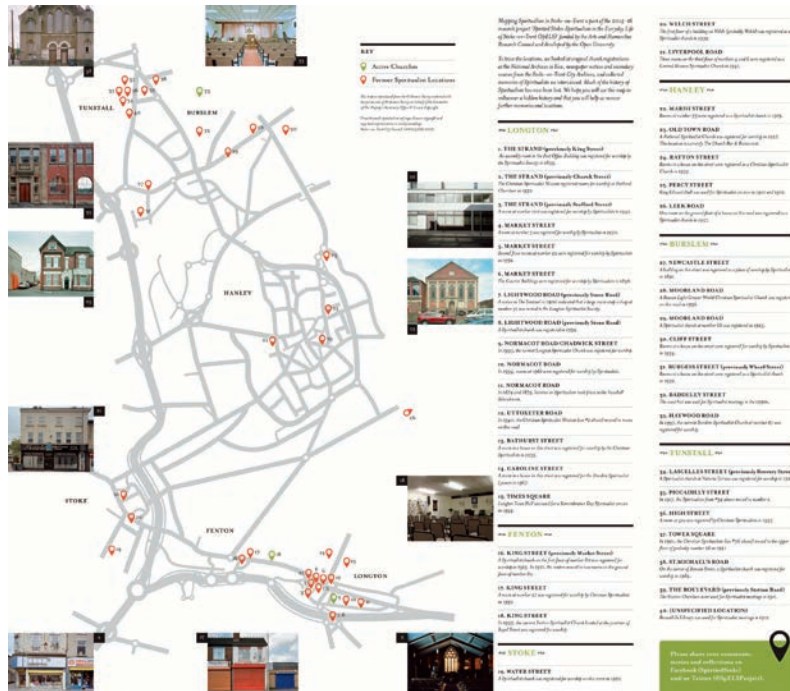


図 1 展示に関連して作成された、かつての心霊主義者教会の場所を記した地図の一部 (Talking with the dead 2015 より)

2.6 霊媒の種類

ここまで、心霊主義の団体や教会、そこに集う人々を取り上げてきたが、次章からはいよいよ霊媒に焦点を当てる。その前に、霊媒の種類について整理しておきたい。

心霊主義における霊媒には、フィジカル霊媒、トランス霊媒、メンタル霊媒の3種類がある²²⁾。トランス霊媒とメンタル霊媒というように、複数の種類の霊媒術に携わる人もいる。いずれも「スピリットガイド」と呼ばれる霊が、霊媒行為を手助けすると考えられている。

2.1 で述べたフォックス姉妹が行っていた、たたくような音を用いて霊と交信する霊媒はフィジカル霊媒である。彼らは、霊媒以外の人にも聞こえたり見えたりするような方法によって、霊と交信をする。他にも机などの物を動かしたり、浮遊させたりする。霊媒の意思に関わらず文字や絵を描く自動筆記 (automatic writing) や、ラップ状の道具を用いて霊の声を直接聞く直接の声 (direct voice) も含まれる。霊媒の身体から霊をエネルギーとして顕現させたとされる「エクトプラズム」を出すのもフィジカル霊媒だ。

しかし、フィジカル霊媒の中には偽者も少なからずいて、懐疑的な人々はそのトリックを暴くため、テクノロジーを活用して、メディアも巻き込んだ。その結果、インチキだと疑う人々を避けるため、トリックを使っていない (とされる) フィジカル霊媒たちも、第二次世界大戦後頃からは公衆の面前で活動することはほとんどなくなった²³⁾ (Spencer 2001: 353–354)。

ただし、心霊主義に一定の理解と経験がある人々から成るサークルにおいては、霊と交流するための訓練の一環として行われることもある。私がグラストンベリーでインタビューをしたシェリーという霊媒も、著名なフィジカル霊媒の自宅で、エクトプラズムを目にし、直接の声を体験したと話してくれた。その晩、私はブリストルでエリスのサークルに参加したのだが、フィジカル霊媒術の1つを体験した。指で触れた机が霊に指示した通りに動き、部屋の端から端まで移動する様子を見たのだ。エリスはフィジカル霊媒でもあり、フィジカル霊媒がいれば霊媒の訓練を受けていない人でも動かせるということで、私も軽く指で触れて、動く方向を指示したところ、写真 13 のように机は動いた²⁴⁾。

このようにプライベートな場では実践を続けているものの、公の場にはめっきり出てこなくなったフィジカル霊媒に対して、現在の主流はトランス霊媒とメンタル霊媒である。トランス霊媒は20世紀初めの第一次世界大戦頃から人気を集めるようになった（モートン 2022: 234）。彼らは自らの体内にスピリットガイドを招き入れると、このスピリットガイドが他の霊と交信し、メッセージを伝える。スピリットガイドの年齢やジェンダー、話す言葉のアクセントによって、顔つきや話し方が変わり、交信中の記憶はないとされる。

一度だけ、トランス霊媒のプライベート・セッションを受けたことがある（2023年8月29日）。グラストンベリーに暮らすゾーイとは、2005年以来交流を続けている。そのため、普段の顔つきや話し方はよく知っているのだが、セッション中はいつもより少し緩んだ表情となり、話し方も甘い口調でゆったりとしていた。ゾーイのスピリットガイドは男性だったが、普段の彼女の声より低い声で話しており、ガイドからのメッセージは人生全般に対するアドバイスのようだった。

心霊主義者教会でもトランス霊媒がデモンストレーションをすることはあるが、特別なイベントなど、サービス以外の場で行われる。SNUの教会はトランス霊媒が一般の人々の前でデモンストレーションをすることに乗り気ではない。なぜな



写真 13 霊媒と共に指を触れて机を動かしている筆者（左）、右は霊媒のエリス（2024年6月5日、ブリストル、参加者撮影、撮影媒体は筆者のスマートフォン）

ら「何も知らない人が霊媒の話し方や顔つきの変化を見て驚くことを心配しているからだよ」とある霊媒は語った。SNUのこの対応は、心霊主義が誤解されないように留意しているとも捉えられる。

心霊主義者教会のサービスやデモンストレーションの際、壇上に上がる霊媒はメンタル霊媒で、精神的なつながりによって霊を知覚できるとされている。彼らは教会内の壇上（プラットフォーム）に立って実施することから、プラットフォーム霊媒とも呼ばれる。

フィジカル霊媒とは異なり、トランス霊媒やメンタル霊媒は物理的な何かを用いたり、動かしたりしないので、霊を知覚しているかどうかを客観的に判断することは難しい。そのため、トリックを暴こうとする人も現れにくく、現在の主流になったようだ。

本稿では、心霊主義者教会で最も一般的で、それゆえに調査をしやすかったメンタル霊媒を主な分析対象とする。以下では特に断りのない限り、「霊媒」は「メンタル霊媒」を指すこととする。

3 デモンストレーション

本章では、心霊主義者教会におけるデモンストレーション、つまり集まった人々の前で霊媒が壇上に立ち、霊から得た情報を聴衆に伝える様子を記述する。どのような準備をし、どのような場所で行われ、どのような霊がやってくるのか。霊からどのような情報が伝えられ、受け取った相手はどう反応するのか、どのような言語を用いているのか。そしてどのような霊媒の評価が高いのか。これらを明らかにしていくことで、霊媒たちの実践の様子を、聴衆の反応にも留意して示したい。

サービスの後半に行われたものも含め、デモンストレーションの際に霊媒が伝える霊からの情報には、その場にいた人々の現在や過去の状況、家族や親族との関係など、デリケートな個人情報が含まれている。そのため、デモンストレーション中に録音はしなかった。代わりにノートを取るか、できる限り記憶し、教会を出た後に帰りの交通機関や公園などでノートに再現した。私に霊が来たときには霊媒との対応に集中し、直後にできる限り詳しく記述した。

先述のように、霊媒は毎週異なる心霊主義者教会を訪れる。例えばSNUの教会に所属する霊媒が、SNUではない教会に呼ばれることもあるし、その逆も然りである。そのため、〇〇心霊主義者教会のデモンストレーションは良い、とはならず、評判の高い霊媒が来る日には、その教会にいつもより多くの人が集まる。つまり、デモンストレーションにおいて教会ごとの違いはあまりなく、霊媒個人の違いの方が大きい。

心霊主義者教会内の様子や霊媒と聴衆のやり取りには共通点が多いものの、細部は異なっている。以下では、複数の心霊主義者教会における参与観察に基づいて、デモンストレーションの日の様子を分析を交えて再現する²⁵⁾。基本的には繰り返し観察された様子や状況を記すが、例外的な状況についても説明し、バリエーションを提示したい。再現部分は、段落の冒頭を2文字下げ、その前後を1行空ける形式で記述している。

3.1 心霊主義者教会の様子

閑静な住宅街の中を歩いていくと、前庭に青い看板が立っている建物が見えてくる。落ち着いた色合いで、周りの住宅に溶け込んでいる。看板には白い文字で「〇〇心霊主義者教会」とあり、サービスやデモンストレーション、ヒーリングやサークルの日時が記載されている。開いている門から敷地内に入り、建物の扉を押して中に入る。

心霊主義者教会であることを示す看板には、青地に白や薄黄色の文字、または白地に青色の文字というように、ほとんどで青が用いられている(写真14・15)。これはイギリスでは、青がヒーリングの色とされているからだと思われる。看板ではなく、ガラス戸付き掲示板を設置し、中に活動の情報を印刷した紙を貼っている教会もある。

一軒家のように独立している建物が多いが、隣とつながっている場合もある²⁶⁾。自前の建物はないが、集まるときのみ公民館などを借りている教会もある。敷地内に駐車場がないところもあるが、イギリスでは条件付きで路上駐車が認められているので、自家用車でやってきた人々が困ることはないようだ。

教会内には様々なビラが貼ってある。外の看板と同じく、各種活動の担当者やその連絡先などの詳しい情報が記載されたビラのほか、担当する霊媒や日時などその月の活動内容や、有名な霊媒のデモンストレーションを知らせるビラなども貼ってある。教会の代表者や理事の名前が写真付きで紹介されたボードや、歴代の代表者が一覧に記されたボードが壁にかかっている。

私が訪れたほとんどの教会において、活動内容はソーシャルメディアやウェブサイトでも確認できたが、理事の名前と写真など個人情報は掲載していないところも多かった。写真と共に教会の歴史を紹介したり、パンフレットを用意したりしている教会もあったが、このような情報もオンラインでは確認できないところもある。ソーシャルメディアやウェブサイトは、どちらかという日々の活動の情報発信に使用しているようだ。

一段高い正面の壇上の中央には花を活けた花瓶が置かれた机があり、その両脇には2脚の椅子が用意されている。この教会の代表者ジーンが、机の上に



写真 14 ロンドン西部の独立系教会。住宅のようなが、青い看板で教会だとわかる (2024年6月27日, ロンドン, 筆者撮影)



写真 15 ロンドン北部のSNUの教会。こちらは白地に青字の看板 (2024年6月29日, ロンドン, 筆者撮影)

水差しと2個のコップを置いている。壇上の端には演台も設置されている。壇上の奥の壁には金色の文字で「心霊主義の7つの原則²⁷⁾」が書かれた紺色のボードが掲げられている。SNUのロゴマーク入りだ。十字架は見当たらない。SNUが作成している心霊主義やヒーリングを説明するパンフレット、AFCの講座を紹介する冊子が置かれたコーナーもある。教会堂に並べられた50脚ほどの椅子の上には、SNUが監修した讃美歌集が置いてある。表紙はやはり濃い青だ。

教壇のように少し高くなった壇上に司会や霊媒は立つことが多いが、机や演台の配置に関して細かい決まりはない。演台の後ろに椅子を置いたり、椅子と椅子の間に演台や机があったりと、SNU所属の教会でも統一されていない(写真16～19)。公民館を借りているところは、机と椅子だけである(写真20)。COVID-19によるロックダウン中に始まったオンライン中継を継続している教会の場合、壇上にスクリーンやビデオカメラなどの機材が設置されている。

「7つの原則」を掲げているのは、SNU所属の教会のみである。SNUではキリスト教色を抑えるため、十字架を掲げないようにしており、SNUの教会では普通、十字架を見かけない。逆にいうと、十字架が掲げられている教会の大半はSNUに所属していない(写真21～23)²⁸⁾。

現在、デヴォン州に暮らす霊媒のジョージは、私の友人ヴィオラの夫で、2009年、自分が所属するサマーセット州の心霊主義者教会に私を連れていってくれた。このトントン新心霊主義者教会は、キリスト教色を薄めようとするSNUの方針に納得できず、離脱した過去をもつのだが、ジョージはSNUの教会を霊媒として訪れるし、SNUの教会に所属する霊媒をトントン新心霊主義者教会に呼んでいる。

多くの教会では椅子は30～60脚ほど用意されていたが、約150脚を備えた、大きな教会も2軒あった。

讃美歌集は、予め椅子の上に置かれている以外に、入り口で手渡されることもあるし、始まる直前に回されてくることもある。SNUを離れても、SNUの讃美歌集を用いている教会もあったし、A4のクリアブックを利用して、独自の讃美歌集を作っている教会もあった。

一部の教会では、メンバーから寄付されたDVDや書籍が、教会堂の片隅に山



写真 16 壇上の机の後ろに3脚の椅子が置かれたSNUの教会(2024年6月28日, ロンドン, 筆者撮影)



写真 17 部屋の一角に演台を設えたSNUの教会(2022年9月18日, ビデオフォード, 筆者撮影)

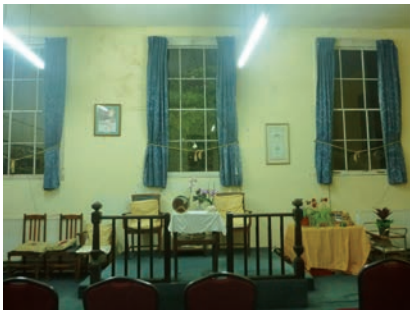


写真 18 小さな机の後ろに2脚の椅子が置かれたSNUの教会(2023年8月19日, ロンドン, 筆者撮影)



写真 19 壇上に大きめの演台が置かれたSNUの教会(2024年6月30日, ロンドン, 筆者撮影)



写真 20 公民館を借りているためシンプルな「演台」の独立系教会(2023年9月13日, ロンドン, 筆者撮影)



写真 21 キリストの絵がかけられていた, 八角形の教会堂をもつ独立系教会(2023年9月5日, エディンバラ, 筆者撮影)



写真 22 正面にキリストと十字架が見られるキリスト教色の強い独立系教会 (2022年9月7日, ロンドン, 筆者撮影)



写真 23 2.2で触れたメソジスト教会だった建物を利用する独立系教会 (2023年9月12日, ロンドン, 筆者撮影)

積みになり、3点1ポンドといった格安の値段で販売されていた。心霊主義とは関係ないものも多い。バザーの残りとして、あらゆる日用品を非常に安価で販売している教会もあった。売り上げは、教会の維持費や動物保護のチャリティのために使われる。

亡くなった教会メンバーの名前と写真の入ったカードを壁や机に飾っている教会も少なくない。死後の世界を信じているとはいえ、心霊主義者たちもそうでない人と同様に死を悲しむ。こうした故人の存在の記憶と想起は、サービスやデモンストレーションの最中にも生じている。例えば音楽が止まったときに、「(霊となった)〇〇のせいだよ!」と言って、一同から笑いが巻き起こるような場面に、何度か遭遇した。

こういった様子からは、教会が単なる個人の信仰の場というだけではなく、やってくる人々がお互いに社交と交流を楽しみ、社会関係を結び、それを継続する場としての役割も果たしていることがわかる。

3.2 デモンストレーション開始前

開始30分前に着いたのだが、早すぎたようだ。教会内を見ている間に、入り口付近に机と椅子、小さなトレイが置かれ、そこに座った初老の女性から声をかけられる。「4ポンド、いただけますか?」今晚の参加費だ。用意しておいた1ポンドコインを4枚渡す。

「お茶かお水はいらない？」彼女の後ろからやってきた初老の男性が声をかけてくれる。外は暑く、のどが渴いていたので、お水をいただくことにする。

心霊主義者教会では、最近では滅多に使わなくなった現金でしか払えない。クレジットカードやデビットカードが使える教会には、一度も遭遇しなかった。もちろん領収書もない。

トイレはもちろんだが、お湯を沸かせ、食器や流し、冷蔵庫を備えた台所をもつ教会がほとんどだ。サービスやデモンストレーションを行う教会堂とは別に、談話室をもつ教会もあり、そういうところではサークルやワークショップは談話室で行っている。

しばらくすると、今夜の霊媒を務める女性リンダがやってきた。事前に電子メールで連絡をしておいたので、挨拶をすると、立ち止まり、この教会の成り立ちなどを教えてくれた。しかしすぐに「瞑想しなくちゃ」と言って、どこかに行ってしまう。

やってきてしばらくは、教会の代表や知り合いとおしゃべりをしている霊媒もいるが、やがてほとんどは姿を消してしまう。心霊主義者教会には霊媒のための待合室があり、多くの霊媒はデモンストレーション開始前、そこで瞑想をする。

教会に行く前、自宅でも瞑想をしている霊媒もいる。先述のジョージは、霊媒をする当日は軽い昼食をとり、昼寝をし、瞑想をしてから出かける。そのため、妻のヴィオラは日曜日の午後は大きな音を出さないよう気をつけて生活している。ある日曜日、ジョージが訪れる教会に同行した。自動車でも1時間ほどの距離だったが、ヴィオラからは質問は帰りにした方がいい、行きはあまり話しかけない方がいいとアドバイスされた。

彼らがこれほど瞑想を行うのは、静かな瞑想により、壇上に立ったときに、霊との関係を作りやすくなると考えているからである。多くのシャーマニズムの儀式では、楽器や歌などの音が霊との交流を促すとされているが²⁹⁾、静的な瞑想は動的なそれらとは大きく異なる。

瞑想をせずとも、一瞬で霊媒行為が可能状態になれる人もたまにいる。ヴィ

オラとジョージから2人の娘はそうだと聞いた。デモンストレーションが始まる直前まで、教会堂手前の談話室でやってきた人々と会話を楽しみ、一緒に教会堂に入り、そのまま壇上に立った霊媒も見たことがある。このような違いについて、心霊主義者たちは「霊媒のやり方は人によって違うから」と、個人差として説明する。

時間になると、司会のジーンと霊媒のリンダが壇上に上がる。30人ほどが席についている。ジーンが「みなさん、こんばんは」と挨拶をし、「初めての人はいますか？」と尋ねると、2～3人から手が挙がる。「私たちは真っ暗な中で霊を呼び出しているわけではありませんからね！」と笑いを誘う。照明が室内を煌々と照らしていて、確かに明るい。こうして緊張がほぐれたところで、その夜の霊媒として紹介されたリンダが、以下のような始まりの祈りの言葉を唱える。その場にいる人々も頭を垂れたり、目を閉じたりし始める。

「天の父なる神、慈悲深き霊よ。今宵、私たちは世界とつながるために集います。私たちは〔スピリット〕ガイドを励まし、私たちの無条件の愛に働きかけたいと願う家族を鼓舞します。この短い時間、2つの世界の間のバールが取り除かれますように。そうすれば、エネルギー同士、つながることができるのです。世界の中で争いに近いところに愛と癒しを送ります。そして今宵、愛する人たちにつながり、出会うのです」

参加人数は、曜日や時間帯、教会にもよるが、多くの場合は10～30人。先程、椅子の数は30～60脚だと述べたが、満席のこともあるし、がらんとしていることもある。

ジーンの発言にある「暗闇で霊を呼び出す」とは、メディアなどでしばしば描かれる、かつての交霊会の様子を指している。心霊主義をよく知らない人々はしばしば、心霊主義をこのようにイメージしていることもあり、彼らを皮肉って笑いを取り、緊張をほぐそうとしているといえる。

霊媒ではなく、司会が始まりの祈りを唱えることもある。始まりの祈りは、この場で直感的に湧き上がってきた言葉を唱えるのが良いとされている。主の祈りを唱えたり、歌を歌ったりすることもある。

霊と交信をする前には必ず祈りを唱える。この祈りにより、霊媒とその場にいる人々に神からの加護が与えられ、守られるとされている。行わないと、良くない霊がやってくる可能性があり、危険と考えられているのだ。

「それでは皆さん、〇〇（町の名前）からやってきたリンダを暖かく迎えてください」そう言ってジーンは壇上の椅子に座る。リンダが壇上に立ち、話しかける。

「こんばんは、皆さん。ここの教会には何度か来たことがありますから、私のことを知っている人もいますよね。また招いていただけてうれしいです。霊が来たら、はい、いいえ、たぶんと言ってください。細かいことは言わなくて構いません。あなたの声が必要なのです」

毎回違う霊媒が来るといっても、一定範囲に暮らす霊媒の数には限りがある。例えば、ブリストルでは同じ霊媒が半年に一回以上はやってきていた。その教会に所属する霊媒が壇上に上がることも多く、彼らは数か月に一度の割合で担当していた。

また、霊の訪れを受けた人は頷いたり、首を振ったりするのではなく、声を出してほしいと依頼されることがしばしばあった。声を出すことで、その人と来ている霊とのつながりが深くなり、霊媒とより良くコミュニケーションがとれるのだと説明された。

3.3 霊からの証拠とメッセージ

「あなたに来てもいいですか。一番後ろの列に座っている男性の方、短く黒い髪で、赤いシャツを着た…」指名された男性トムが気づき、リンダと目を合わせる。軽く頷く。「白髪の男性が来ています。丸顔。頑固。たばこの匂いがします。茶色のコートを手を持っているのが見えます。『私の杖に触るな』と言っているのが聞こえます」トムが答える、「父です。喫煙者でしたし、晩年は足が悪く、いつも杖をついていました」

霊媒が知覚できるのは、その場に集まった生者が知っている死者の霊である。

だから、霊媒から〇〇（人名）を知っているか、と訊かれたとき、生きている人ではなく、すでに死んでいる誰かの中から心当たりを探さなくてはならない。そのため、死者となった知り合いが多い高齢者の方が選択肢は当然多い。また、イギリスでは子供や若年層の死亡率は高齢者の死亡率より低いいため、やってきた霊が子供や若年層の場合、心当たりの人は少なくなる。ペットの霊がやってくることもある。飼っている人が多いからか、ほとんどは犬か猫だ。

リングはやってきた霊と関係がある生者をピンポイントで決めている。指名されたと伝えるため、無言で目を合わせようとしたり、手で指し示したりすることもあるが、言葉をかけるときは、「私が選ぶ（choose）」ではなく、「霊が来る（come）」という言い回しを用いる。これは、霊がやってきた生者は霊媒が選んだわけではない、やってきた霊とたまたま関係していたのがその生者だった、という姿勢の表れである。

リングのように指名するのではなく、「この辺り」と会場の一部を手で指し示す霊媒もいる。その辺りに座っている誰かのもとへやってきた霊というわけである。

集まった人々に対し、霊の特徴を述べ、心当たりがある人に手を挙げてもらう霊媒もいる。「女性が来ています。小さい頃はぼんやりと見えていたけれど、少しずつ失明し、完全に視力を失いました。盲導犬がいます。とても強い女性です。納得できる人はいますか」という感じだ。複数人の手が挙がることもある。逆に手が挙がらなければ、霊媒はさらに特徴を挙げていく。誰かが手を挙げるまでやめない霊媒もいるし、ある程度試みて誰からも手が挙がらなければ次にいく霊媒もいる。

このように、霊と関係する人を特定するやり方は霊媒によるが、私の調査中にはピンポイントで決める場合が一番多かった。初めは心当たりの人に手を挙げてもらっていても、手を挙げる人がいなければ指名するというように、柔軟に対応する霊媒もいた。

会場にやってくる霊は、繰り返しになるが、その場にいる生者に関係する亡くなった知り合いである。19世紀にはベンジャミン・フランクリンやトーマス・ジェファーソンなど歴史上の人物の霊と接触したと主張する心霊主義者もいたが（East Hamilton Spiritualist Church）、現代ではそういうことは起こらない。2022年の調査中、エリザベス2世が亡くなり、どの心霊主義者教会でも女王の写真が飾

られ、話題になっていた。にもかかわらず、女王の霊がやってくることはなかった。女王を直接知る人、親しい人がいなかったからである。やってくるのは父母や祖父母が圧倒的に多い。兄弟姉妹やおじおばといった血族のほか、姻族もよくやってくる。それほど多くはないが友人もやってくる。意外と多かったのが隣人である。心当たりを訊かれたとき、身近に暮らしていた隣人は、咄嗟に思い浮かびやすいのかもしれない。

霊媒のリンダは、続けてトムに尋ねる。「あなたは最近、外国を訪れていますね。パスポートが見えます」「はい」「トルコ?」「いいえ」「ギリシャですか?」「はい」「青い空とビーチが見えました。旅行ですか?」「はい、家族と一緒に」「あなたのお父さまも一緒にいたのですよ。あなたを守っていたのです」「わかりました」「他の人があなたを批判しても、聞かなくて構いません（と言って耳を塞ぐ仕草をする）。あなたが成功するところが私には見えます」

霊は身体がないので、どこへでも行ける。だから、トムの父親の霊は息子の旅行にも付いていけたのだ。

さて、霊媒が1人にかかる時間はおよそ7～8分である。この間に、やってきた霊がその人と関係していることを示す「証拠」と、霊からの「メッセージ」を伝える。「証拠」とは、その霊が対象の生者に自分だと確信してもらうために伝える、自分の特徴や、その生者がやっている何かである。「メッセージ」は霊が対象となる生者に伝えたいことである。霊は何らかの方法を用いてメッセージを霊媒に送り、それを霊媒が伝える。リンダの最後の発言は彼女からのメッセージのようだが、霊となったトムの父親が霊媒を通して伝えているメッセージなのだ。

メンタル霊媒は証拠とメッセージを霊からの情報として伝えるが、これはメッセージのみを伝えるトランス霊媒との違いでもある。メンタル霊媒はプライベート・セッションの際も両方を伝える。

リンダとトムのやり取りは続く。

「後ろから別の霊が現れました。女性です。小柄な人で微笑んでいます。もう1人現れました。男性です、軍服を着ている。勲章もつけている。わかり

ますか?」「家族に軍人はいません」「彼はどこかに行ってしまいました。女性はまだここにいます。お母さまは霊ですか?」「いえ、まだ地上 (Earth) です」「たくさんの子供がいます。教師だったのかも」「おばかもしれません」「父方?」「はい、父の姉妹です。私たちはとても親しかったです」「ガンだった?」「肺ガンでした」「『今はもう苦しくない。だから心配しないで、と伝えて』と言っています」「わかりました」

このように、霊がやってきた生者のもとに、続けて別の霊が1～数人やってくることがある。2人の霊が同時に来る場合、同じ生者に来ることもあるし、別の生者に来ることもある。しかし、霊媒は普通、一度に1人の霊しか相手にしない。しばらく経つと、どちらか一方が後方に下がるなどして待つか、どこかに行ってしまう。

ときには唐突に話題が変わる。

「May は?」「名前ですか?月ですか?」「わからない。May とだけ得ました」「娘の名前はリリー・メイ (Lily-May) です」「John か Joseph は?」「父の名前は John です」「87 という数字は?」「私の住所の番地です」「7月26日は誕生日か、記念日か、命日か何か?」「7月23日なら、母の誕生日です」「数日の違いは許容してください」

このように名前や数字を挙げ、心当たりを訊くこともよく行われる。日付は具体的な月日に限らず、5月、6月、7月というように、大雑把な場合もある。過去のことなら、誰かの誕生日、記念日、命日といった特別な日ではないかと訊かれる。未来のことなら、その日に何かが起こるから覚えているようにと言われる。日付の多少のずれは許容範囲とされていた。

リンダは続ける。「パリに行く予定はありますか」「ありません」「フランスかも」「留めておきます (I hold it)」

再びおばについて、トムに尋ねる。「おばさまは猫を飼っていましたか?」「犬なら飼ってました」「小さい犬?」「大きい犬です」「黒ですか?」「茶色

です」「子供の頃、お父さまと一緒に黒猫を飼っていたということは?」「わかりません。古い写真を見たら、わかるかもしれません」「そうしてください。明らかに黒猫です。あなたが知らないのかもしれませんが」

霊媒からの情報に心当たりがない場合は、伝えられている側が「留めておきます」と言ったり、霊媒が「留めておきなさい」と言ったりして、その話題を終わらせることがある。これは「覚えておく」という意味で、自分または相手には今心当たりがないが、後でわかるかもしれない、あるいは今は予定がないが、近い将来そうなるかもしれないということで、霊媒の言葉を心に「留めておく」のである。

霊媒が与える証拠が生者の知る事実とは合わないこともある。それは、この時点での生者にとっての「事実」であり、霊媒が示す証拠はその生者が忘れている、あるいは知らないという風に解釈される。あくまで霊の視点からの情報なので、その生者が知らない姿、知らないことを霊が話しているとみなされるのである。このようなとき、しばしば霊媒は「『兄弟がいますね』と言ったところ、『私は一人っ子だからありえない』と返した女性がいましたが、数日後、『その通りでした。両親に尋ねたら、生まれる前に亡くなっていた兄がいたことが分かりました』という連絡がありました」というように、自分が得た霊からの情報は絶対だ、と印象づけるエピソードを付け加える。

いずれにしても、霊媒の言ったことは絶対に否定できないようになっているのだ。

「おばさまはあなたを誇りに思っています。愛しています」「わかっています、ありがとうございます」「私は彼女をあなたに残します (I leave her with you)。ありがとうございます」

リンダが再び、軍服の男性が戻ってきた、と言う。そのとき、トムの斜め前に座っていた女性オリヴィアが発言する、「祖父だと思えます」。リンダはオリヴィアに視線を移す。「あなただったのですね」そうして今度は、オリヴィアに対して霊からの情報を伝え始める。

ある生者へ情報を伝えることを終えるとき、「私は〇〇を残す」という表現がよ

く使われる。具体的な霊だけではなく、なかなか生者が心当たりを見つけられない場合も、「それをあなたに残します」と霊媒が言って終わらせることがある。

やってきた霊が、そのとき霊媒が話していた相手とは別の人の知り合いということもある。「あなたはどうですか」と霊媒が指名することもあるが、やり取りを聞いていて、手を挙げる人も多い。後者の場合、そのときに話していた相手とのやり取りをもう少し続けてから、心当たりがある次の人に移ることもある。

デモンストレーションの間、どのような動作をするかは霊媒によって異なる。身振り手振りの大きな人や、壇上を所在なく歩き回る人もいれば、1か所に立っている人もいる。時々誰もいない方向を向いて話している人もいたし、耳に手を当ててよく聴こうとする仕草を見せる人もいた。

証拠は示さず、霊からのメッセージとして未来へのポジティブな言葉を伝える霊媒もいた。あるデモンストレーションのとき、霊媒と私の間で次のようなやり取りがあった。霊媒から「あなたは生まれながらにヒーラーです。ヒーラーをやるつもりはありませんか」と訊かれた。ヒーラーの訓練を受けることを提案されたいらしい。私は「考えます」と答えた。すると「5～6週間のうちに調べて、その後に決めれば良いのです」と提案され、「わかりました」と伝えた。他の聴衆に対しては「ステップを踏んで、もっとゆっくりと」とか「ただ『私は美しい人間だ』と言いなさい。それを称賛する人が現れるように」などのメッセージを伝えていた。

どの死者の霊からのメッセージなのかはよくわからなかったし、霊からのメッセージとはせずポジティブな言葉をかけるだけで十分な気もするが、会場を見ている限り、不愉快そうな人はいなかった。心地良い言葉をかけられたい人々からの一定のニーズはありそうだった。

霊とのつながりを強め、メッセージを得やすくするためとして、パワーストーンを手に握っている霊媒に2人会った。メッセージが書かれた巻紙を使用するという珍しい霊媒もいた。彼女は幅1.5cm、長さ30cmぐらいの巻き紙を15～20片ほど入れた箱を持ってきていた。そこには霊に頼んで、得られたメッセージが書いてある。例えば「彼らが到着した最初の瞬間の光は、彼らを迎えるためにそこにいた人々だった」のような感じだ。彼女はそれを読むと、霊がやってきて、どの生者のところに来たのかもわかるとのことだった。しかし、デモンストレーショ

ンの際に道具を使う霊媒は稀で、多くは何も使わない。

3.4 デモンストレーション終了後

1 時間ほど経ったところで、霊媒のリンダが「霊の世界は行ってしまいました。皆さんありがとう」と言っ、デモンストレーションは終わった。彼女は少し疲れた様子だった。司会のジーンが立ち上がり、リンダに近づく。「ありがとう、リンダ。祈りをして終わりましょうか」。リンダも同意し、以下のような終わりの祈りの言葉を唱え始める。

「父なる神よ、偉大なる霊よ。今回もまた、友人たちの愛にとても近づくことができました。本当に感謝しています。私は今、少し静かな時を過ごしています。私の家族、私と私の姉妹たちにヒーリングを送ります。他の全ての人たちにも霊への祈りを送ります。ありがとう。神のご加護を。アーメン」

短ければ 40 分程度、長くても 1 時間程度で、霊媒によるデモンストレーションは終わる。時間の長短は教会の進行の状況やその場の雰囲気だけではなく、霊媒個人のスタンスや当日の参加人数にも左右される。大半の霊媒は、霊媒行為によって疲れることはないと言う。しかし、1 時間ほど立ったまま、話し続けているせいもあるのか、終わった後は疲れているように見える。

終わりの祈りも、初めの祈りと同じく、その場で浮かんできた言葉を唱えることが良いとされる。デモンストレーションは祈りで始まり、祈りで終わる。祈りが霊とコミュニケーションする時間帯と、そうではない通常の時間帯との境界となっている。また加護を依頼する対象は、霊との交信を助けてくれる個々人のスピリットガイドではなく神である。天使に頼むこともあり、キリスト教の影響が窺える。

デモンストレーションが終わり、足早に立ち去る人もいるが、残っておしゃべりを続けている人もいる。「お茶かコーヒーはどう？ 台所に行けばあるよ」と声をかけられ、台所へ行って自分で紅茶を用意する。

興味深かったのは、心霊主義者教会では多くの活動が夜に行われているにもか

かわらず、アルコールを飲む人がいなかったことだ。教会内だけではなく、その後パブに行くような雰囲気も全くなかった。

実は禁酒運動が広がった19世紀から、アルコールは霊媒としての能力を損なうと考えられていた(Nelson 1969: 122)。確かに、霊媒たちはアルコール、そしてドラッグを嫌悪している。例えば、ジョージは決してアルコールを嗜まないと、アルコールが嫌いではない妻のヴィオラは何度か私に愚痴っていた。ブリストルのエリスは「霊媒であるためには自制心が必要。だからアルコールもドラッグもやらない」と言い、隣にいた別の霊媒も同意した。アルコールやドラッグを摂取すると、多くの場合、普段と異なる意識状態に陥ることができるが、それでは霊媒行為は行えないと考えられているのである。

なお、その場にいる生者が再会を願う死者の霊を呼び出してもらえないわけではない。来るか来ないかを決めるのは霊自身だからである。また、自分が死んだことを十分に受け入れていなかったり、生前に死後の世界があることを否定したりしていた霊は来ないと考えられている。それはプライベート・セッションでも同じである。

3.5 用いる言語

本稿で取り上げている霊媒はイギリス人やアイルランド人など、英語を母語とする人たちである。しかし、やってくる霊は英語圏以外に暮らしていたり、出身だったりして、英語を理解しない場合もあるだろう。私の場合も、やってきたほとんどの霊は、4人いる祖父母の誰かだったが、祖父母たちが会話ができるほど英語が得意だったとは思えない。どうやってコミュニケーションをとっていたのだろうか。

エリスは「日本語で話しかけてきていたよ。何度か、英語はわからない、ほとんどわからないと言っていた」と言う。彼らの片言の英語の理解に努めながら、会話をしていたと言うのである。普段から英語をあまり話さないインドやパキスタンの人も多くやってくるので、こういう状況には慣れているようだ。

しかし私がこの質問をした霊媒のうち、言語の違いを乗り越えて、いくつものセッションを行ってきたと答えたのはエリスだけだった。ロンドンの心霊主義者教会で、私にメッセージを伝えたある霊媒は「脳内で置き換えているからわかる。

あらゆる言語を習わなくても大丈夫」と言い、プライベート・セッションを頼んだロンドン在住のレベッカは「英語が聞こえてきた。たぶん翻訳されているんだと思う」と言った。2人は英語でスムーズにコミュニケーションをとれていると考えていた。

言語以外の方法を用いると考えている霊媒もいた。ジョージは「あなたのおじいさん、おばあさんは、自分たちが知っている言語で話しかけてくるんだ。霊になったら日本語や英語などで話すわけではないと覚えておいて。私たちは1つになっているから。(中略)望めばテレパシーを使って話すこともできるんだ」と説明した。霊の世界では個々人の違いは消失し、一体化するため、問題なく話せる状態になっている、と彼は理解していた。

霊の世界には言語はなく、感覚 (feeling) でコミュニケーションをとると言う霊媒にも、先程とは別のロンドンの教会で出会った。その理由を彼女は「あなたのおばあさんは、もう日本人ではないのです。そういうのはちょっと変な言い方かな。彼女は日本人女性だった体験をもつ魂なんです」と説明した。

霊とのコミュニケーションに関し、英語を使うのか、それ以外の言語も使うのか、そもそも言語を使うのか、という点で、霊媒の間に統一した見解はないことがわかる。

3.6 霊媒への評価

では、デモンストレーションではどのような霊媒への評価が高く、あるいは低いのだろうか。

本稿に繰り返し登場しているエリスに初めて出会ったのは、2022年9月11日の夜、ブリストルのノウル心霊主義者教会のサービスだった。普段は寄付金のみでサービスを実施しているが、1か月に一度、資金集めのため5ポンドをとり、デモンストレーションだけを行っている。このときはたまたまその夜に当たっていた。

室内には60脚ほど椅子が並べてあった。そこにいた女性から「ここに来るのは初めて？ 運がいいね。今日やってくる霊媒はブリストルですごく有名なんだよ」と教えられる。この晩はなんと60人どころか90人近くやってきて、椅子が足りなくなった。先述のように、デモンストレーションやサービスに集まるのは普通

10～30人である。会場がバス停に近い、闘病していた彼女の久しぶりの登壇だったという理由もあるだろうが、心霊主義者教会の活動で、あれほどまでに人が集まったのを見たのは、この夜だけである。

デモンストレーションが始まって、彼女がなぜそれほど人気なのか、すぐにわかった。明るく朗らかで、皆を笑わせるようなことも言い、その場において楽しい、というだけでなく、堂々としていて発言がテンポよく、非常に具体的なのである。約90人の中から、迷わずにピンポイントで誰かを指し、「昨日、マッシュルームをむきましたか」「むきました!」、「今日、ブリストルの博物館に行きましたか」「カーディフの博物館なら行きました」というような具合で、ぼんぼんと発言していく。何より驚いたのは、「子供の頃、クリスマスツリーの飾りを持っていましたか、サンタクロースの…」と尋ねたときだ。サンタクロースの飾りなんてありきたりで、誰でも持っていたのでは、と思った瞬間、「バイクに乗った」と付け加えた。指名されていた相手は「持っていましたよ!」と興奮した様子で肯定。彼女は小さくガッツポーズをし、会場からは歓声が沸いた。

その後、多くのデモンストレーションに参加したが、評価が高かった霊媒はエリスのように、場を盛り上げ、自信をもって具体的に発言している人だった。発言に対し、相手がなかなか頷かない霊媒もいたが、自信たっぷりに発言したり、会場を沸かせたりしている限り、それほど評価は落ちていなかった。

逆に言うと、それらが欠けている霊媒の評価は低い。私が初めてデモンストレーションに参加したのは2006年夏、今はもう閉鎖されたバースの心霊主義者教会だった。その日の霊媒は「子供の頃、母親とニンジンとを切ったことがありますね」「周りに犬を飼っている人がいるでしょう」「細長い台所を持っていますよね」など、当てはまらない人の方が珍しいような、一般的な発言を繰り返していた。

私も指名された。当時、修士課程の2年目だったのだが、「学生ですか」と訊かれ、「人類学を専攻しています」と答えた。すると、「君は今やっていることを楽しんでいないね」と言われる。全く逆だったので、「そんなことはないです。とても楽しいです」と答えたのだが、「いや、そんなはずはない。楽しくないはずだ。18か月後には違った道を歩んでいるはずだ」と言われる。博士課程に進学して人類学を続けたかったのですが、それでは困る。「それは嫌です」と言い返すと、「そういうことになっているんだ」と強く言い返された。

今思えば、むきになって言い返すことはなかったし、霊媒の言うことは絶対とされているのだから、私も対応を誤ったのだが、当時は進学を否定された気がして、非常に不愉快だった。デモンストレーションにはもう行きたくないと思ってしまったほどだ。私に限らず、不愉快だと感じた人は少なくなかった。終了後、教会のメンバーと話をしていたのだが、「今日の霊媒は好きではなかった。マナーが良くなかった」とか、「今日の霊媒は良くなかったね。デモンストレーションをするときは謙虚で誠実であるべきなのに、彼はそうでなかったので、楽しくなかった」など、厳しい評価が下されていた。

あまりにひどい場合、席を立てて帰ってしまう人も出てくる。2024年に訪れたロンドンのある教会のデモンストレーションがそうだ。この夜の霊媒は始める前、ぼそぼそと「私は指名はしない」と言った。来ている霊の特徴を述べて、思い当たる人に手を挙げてもらうスタイルということだ。その後「私は亡くなったときの状況を吸収します³⁰⁾」と陰気に言うので、会場は葬式のような暗い雰囲気になってしまった。

まず、「[来ている霊は] 亡くなったとき、呼吸の問題を抱えていた」と言う。多くの人は肺炎で亡くなるから、これは多くの霊に当てはまってしまう。実際、3人から手が挙がり、そのうち2人とは一通りのやり取りがあったが、1人は全く無視されていた。続いては「10歳ぐらいの女の子が来ている」と言う。先述のように、子供の霊が来ている場合、心当たりのある人の絶対数が少ない。案の定、誰からもなかなか手が挙がらないが、霊媒は壇上でおろおろしているばかりである。その後もずっとか細い声で、おどおどと自信がないように話し続けていた。

その場には20人が来ていたが、3人が途中で帰ってしまった。途中退席者を見たのは、この晩だけである。1人は怒っている様子だったし、1人は「こんなのくだらない (This is a clap)」と小声で吐き捨てて去った。残った人たちも3人は寝ているし、1人はずっとスマホをいじっているなど、霊媒が会場の注意を引きつけられていないのは明らかだった。

彼女の問いかけに手を挙げる人もいなくなり、仕方なく霊媒は指名を始めた。指名された人たちが霊媒の発言をじっくりと聴いている様子はなく、「はい」「はい」と答えている。笑いが巻き起こるような楽しい雰囲気はなく、終わるのをひたすら耐える雰囲気になっていた。

心霊主義者教会における参与観察からは、具体的な発言をできる人、堂々と自信をもって発言している人が、「良い」霊媒とされているようだった。さらに終了後、「良い時間を過ごせたね」「今晚は楽しかったね」という会話も交わされていて、ショーとして楽しめたかどうかとも重視されている様子が窺えた。

オーストラリアの心霊主義者教会の調査を行った Tomlinson は、成功しやすい霊媒の特性として、自信をもっていること、物語のセンスに優れていること、柔軟であること、ユーモアのセンスがあることの4点を挙げているが (Tomlinson 2024: 81-82)、いずれも私の参与観察から得た結果にも当てはまっているといえよう。

4 霊媒たちの語り

本章では、メンタル霊媒たちとの会話やインタビュー、及び自伝から、彼らがなぜ、どのようにして霊媒になり、またいかにして霊を知覚しているのかを明らかにしていく。

4.1 霊媒になったきっかけ

子供の頃から、他の人には見えない存在が見えたり、声が聞こえたりする経験をもち、成長してから霊媒としての訓練を始めた人がある。一方で、大人になってから、何らかのきっかけで霊媒としての道を歩み始めた人もいる。本節では、霊媒としての能力に気づいた時期と霊媒になるまでのプロセスのほか、遺伝するのか、誰がなれるのかということを検討する。

4.1.1 子供の頃から気づいていた

ブリストルのエリスは、子供の頃から他人には見えない人が見えることがあった。母親に伝えると、「私も見えるけど、パパはそういうことを嫌がるから口にしなないようにね」と言われた。イングランド国教会に通っていたので、死者と話す霊媒がいる心霊主義者教会は恐ろしく感じられ、気になりつつも、ずっと迷っていた。30代半ばになり、意を決して行ってみたところ、その日の霊媒が非常に良く通い続けることにし、サークルにも入った。じきに教会の人に勧められ、彼

女自身サークルを主催するようになる。あるとき、元同僚の配偶者が亡くなり、その家族に頼まれて、何度かプライベート・セッションを行う。すると口コミで評判が広がり、セッションを受ける人がやってくるようになった。のちにアメリカのある心霊主義団体の講座と実技試験を受けて、その団体から霊媒としての能力があることを認定され、証明書を授与された。

エリスのように、子供の頃から霊が見えていた、声が聞こえていたという人でも、幼い時から霊媒としての訓練を始めていた人はいなかった。両親が霊媒行為についてあからさまに話すことを好まない場合、子供は自分に起こったことをよく理解できず、興味も失ってしまう。しかし、何らかのきっかけで心霊主義者教会に通い、サークルに入るなどして、霊媒としての能力を開発していた。

エリス以外にも例を挙げておこう。エリスの友人でもある、ブリストルに暮らすベッキーは、姉が幼い頃から霊と関わっていたが、両親はそのことを好ましく思っていなかった。そのため、ベッキーにも霊が話しかけてくることはあったが、両親には怖くて言い出せなかった。10年ほど前、霊とワークすることに関心をもつ。姉に相談したところ、サークルに通うことを勧められ、そこで能力を開発していった。

エディンバラ出身のニーナは、子供の頃から誰もいないのに人の話し声が聞こえたり、古い建物に行くと人が見えたりしていた。スコットランド国教会に通っていたこともあるが、スコットランド西部のアイオナ島で霊の世界を感じ、霊たちともっと関わりたくなる。帰宅後に心霊主義者教会を探していると、同僚が自分の通う教会に連れていってくれた。そして教会のサークルに入り、能力を開発した。

ロンドンのレベッカは幼い頃、階段の上に霊を見たことがあるし、いつも他の人には見えない誰かと庭で話していた、と父親から指摘されていた。長い間そういう体験はしていなかったが、母親の死後に霊を見る機会が増え、サークルに通い始め、霊媒になった。

ストーク・オン・トレントに暮らすキャロルは、自分を生まれながらの霊媒と考えていて、幼い頃から霊媒としての素質に気づいていた。しかし、霊媒を始めたのは妊娠中に胎児ともども死にかけたとき、現れた祖母の霊に助けをもらう経験をしてからだった。

子供の頃から素質はあっても受け皿がなく、開発は成人後という状況は、魔女術令が廃止されたとはいえ、霊媒行為が違法だった時代の影響が残っていたからかもしれない。というのもベッキーの娘やジョージとヴィオラの娘は、霊媒である親の理解もあり、10代の頃から開発を進めているからだ。霊媒としての能力の開発時期は、低年齢化している可能性がある。

4.1.2 大人になってから気づいた、なりたくてなった

霊媒たちが幼い頃に霊を見た経験をしていることは、Gilbert (2008: 284) や Tomlinson (2024: 143) でも指摘されていた。しかし、私がインタビューをした霊媒の中には、大人になってから特異な体験をし、霊媒になった人もいた。

デヴォン州のジョージは50代のとき、就寝中に寝言で外国語を話していると家族から指摘される。録音してインターネットで調べたところ、古代の言語、アラム語だとわかった。じきにあるアラブ人がスピリットガイドとしてやってきた。そして彼は心霊主義者教会とサークルに通うようになり、霊媒としての能力を開発していった。しかし、ヴィオラによれば、ジョージはこの出来事が起こるよりずっと前から霊的な事柄に関心をもっていて、新婚旅行先もAFCだったそうだ。

たまたま間違えて心霊主義者教会の建物に入り、デモンストレーションに参加し、そのときの霊媒から霊媒になることを勧められた人もいた。先述のグラストンベリーに暮らすシェリーは、心霊手術をする外科医の下で働いているうちに、霊からのメッセージが聞こえるようになり、能力を開発したと語った。

大人になってから霊媒としての能力に気づいた彼らは、いずれもこのような事柄が実際に起こることを許容しやすい環境にいた。ジョージはAFCに通っていたし、シェリーは心霊手術に関わっていた。もう1人も偶然知り合った霊媒のデモンストレーションを見たことがきっかけだった。

特別な経験はなかったが、霊媒になりたくてなった人もいる。ロンドンに暮らすカレンやアイルランド出身で現在はウェールズに暮らすエイミーは、仏教や占い、ヒーリングなど、様々な霊的な事柄を探求していく中で、霊媒術に関心を持ち、能力を開発していったと語った。エイミーと同じくアイルランド出身のドルーは、10代の頃カトリックの学校に通っていた。しかし、事故で亡くなった級友に会えるはずという考え方を学校から認めてもらえなかったため、神父になること

をやめ、霊媒になりたいとロンドンにやってきて、心霊主義者教会に通った。じきにスコットランド人の霊媒である友人が、彼のアパートに居候することになり、その友人が開いたサークルに参加し、霊媒になった。

誰でもが望めば、能力の高い霊媒になれるわけではないが、彼らは望み通り、クライアントをとれるほどの霊媒になれた。これらの事例からは、特別な経験がなくても霊媒になれる人もいることがわかる。

4.1.3 親族内での遺伝

私の調査では、霊媒としての能力に気づいた時期と、上の世代からの霊媒能力の遺伝の間に、明確な関連性はなかった。ただし、霊を知覚できたり、占いや予知をしたりしていた親族がいると答えた霊媒たちは全員、その親族は母親や姉妹のほか、母方・父方に限らず祖母やおば、曾祖母だと答えた。子供世代への遺伝についても、娘に特殊能力が現れていると答えるケースが多かった。霊媒には女性が多いと 2.4 で指摘したが、インタビューからも親族内では女性に能力が現れやすいと考えられていることが分かった。

遺伝について、もう一点興味深かったのは、本人または上の世代にスコットランドやアイルランドの出身者が少なからずいたことである。そのうちスコットランドの首都エディンバラに暮らすニーナやその友人のフェイなどは、エディンバラ出身のウィルソン博士から紹介されたため、出会ったことは偶然ではないが、エイミーやドルーは話をしていくうちにアイルランド出身だとわかった。また、偶然出会ったキャロルは母方の祖父母がアイルランド出身で、祖父はロマニー・ジプシーだと教えてくれた。

スコットランドやアイルランドは先住民のケルト系の人々が多いとされ、いずれもマジョリティのイングランドに対して、マイノリティとされる地域である。両親と親族がスコットランド西部の小さな島の出身である長年の友人（70代）は、私が心霊主義の研究を始めたことを知り、霊媒能力をもつ親族の話をもつ親族の話を 2 時間以上ノンストップで語り続けた（2023 年 8 月 28 日）。生まれる前に亡くなった父親と話していた本人、亡くなった夫から出産時期を告げられた母親、時間や場所を選ばず霊が来ることで日常生活に支障をきたしていた従姉妹、祖母など何人もの人が見えていた従姉妹の娘。おばは第二次世界大戦中、海で溺れている弟を助けて

いる場面を見たのだが、弟の乗っていた軍艦はドイツに爆撃され、彼だけが助かっていた。いずれも女性親族であり、霊媒として活動はしていないが、霊が見えたり、聞こえたりしている。このような不思議な能力について彼女は、「ケルトの血筋かもしれない」「スコットランドの島には、今でも原始的な (primitive) 生活をしている人がいるからかもしれない」と考えていた。

インタビューでは、キャロル以外は自らの出自と霊媒としての能力を結びつけていなかったし、現在「ケルト」という民族分類は国勢調査などに存在しないため、民族と霊媒の能力を関連づけることは不可能だろう。しかし、女性や民族的マイノリティなど周縁的な立場にある人がシャーマンになる事例はいくつも報告されており (cf. ルイス 1985)、シャーマンと同様の状況がイギリスの霊媒にもみられるといえる。

4.2 霊からの情報を受け取る訓練

第2章で指摘したように、霊媒としての能力を開発したい人は、一般的に熟練の霊媒が開いている定期的なサークルに通い、人によってはAFCが開いているような集中講座に時折通う。キャロルのみサークルに通ったものの、他者と一緒に開発するやり方が合わず、途中でやめて、AFCのような講座やヒーリングを通して開発していた。しかし、徹頭徹尾、1人で本を読んだり、ソーシャルメディアを閲覧したりして開発したという霊媒には出会わなかった。つまり、霊媒としての能力を高めたいという同じ目的をもつ人々のサークルや講座といった集まりに参加して、互いにやり取りをすることが、霊媒の能力の開発には欠かせないと考えられる。

すでに触れたが、サークルには2種類あり、オープンなサークルは直感力を鍛える、クローズドなサークルは霊媒としての能力を開発する場だと位置づけられている。

4.2.1 オープンなサークル

私が参与観察をしたオープンなサークルでは、目を閉じて静かに瞑想をし、得られた何らかのヴィジョンを集まった人たちと共有することが行われていた。その際、ヴィジョンが見えるだけでなく、メッセージを得たり、音や匂いなど他

の感覚を得たりすることもあった。瞑想の際には、美しいファンタジーのような世界観を主催者が語り、参加者はその言葉の情景を頭に思い浮かべるガイド付き瞑想（guided meditation）が行われることもあった。言葉という補助線を通して、頭の中にヴィジョンを描きやすくする効果があると考えられる。ヴィジョンを発表した後に、主催者がそのヴィジョンの意味を解説するサークルも複数あった。主催者が差し出したオラクルカード³¹⁾を引き、参加者がかかれたメッセージと絵の意味を考えたり、得られたヴィジョンやメッセージはどの参加者に向けられたものかを考え、相手に伝えたりしたこともあった。

訓練において共通していたのは、頭の中にヴィジョンやメッセージを創造したり、その意味を自分なりに読み解いたりすることであった。サークルに参加した経験が少ない人の中には「何も見えなかった」「心地良く瞑想していただけ」というように短く発言している人もいた。一方で主催者など、霊媒としての経験が長い人は「小柄な女性が来ていた。白い髪の毛。すごくすごくすごく忙しい。（真ん中の3本の指でぱぱっと払う仕草をしながら、）人を指図してぱぱっと使うような人。いつも人に食事を食べさせている。あなたがきちんと食事をしていない、良い食べ物を食べるようにと言っている。旅をしていてすごく忙しいから休むようにとも言っている。あなたのエネルギーは今、とても低いですね。（私は苦笑いしながら、「はい」と答える。）彼女はそれを上げようとしている」というように、具体的な言葉が次から次へと出てきており、ヴィジョンを得たり、メッセージを創造したり読み解いたりするには、ある程度の経験も必要だと考えられる。

4.2.2 クローズドなサークル、集中講座

それでは、招待された人だけが霊媒としての能力を開発するために集まるクローズドなサークルではどうなのだろうか。インタビューに基づけば、サークルの参加者同士の間心理的なつながりを作り、瞑想中に見たメッセージを互いに伝えることを繰り返す練習をする。そして、十分だと判断されれば、心霊主義者教会の壇上に立ち、一般の人々にメッセージを伝えることを始める。これは、私が誤って参加してしまった、霊媒としての能力を開発する AFC の集中講座と目的も実践内容も酷似しているので、本節ではその様子を記す。

霊媒術の概要を学びたくて、日時の都合が良かった「魂の深淵（Depth of the

Soul)」というオンライン講座に申し込んだことがある。2022年8月6日～7日、イギリス時間の午前10時～正午（日本時間の午後6時～8時）、費用は60ポンドである。

私は座学だと思っていたのだが、実はこの講座、ある程度、霊媒としての訓練を積んだ人向けの、実践的なスキルを磨く講座だった。講座が始まってからそのことに気づいたものの、全く経験がなくても構わないと講師に言われ、結局最後まで受講した。講師はオーストラリア人女性で、受講生6人も全て女性だった。出身国はオーストラリア、イギリス、ドイツ、ノルウェーであり、私以外は皆、白人だった。1日目は、ペアになって、相手の知っている霊とコミュニケーションをとろうとした。2日目は、その場にいる霊の特徴を挙げていき、心当たりの人に手を挙げてもらった。

初日に「どんなにくだらないことでも大丈夫」「新しく来た人（＝経験の浅い人）は体験を信頼して」といったアドバイスを受ける。自分が得た体験を信頼する、という言葉は、2日目に実際の行動として表れた。

念のため書いておくと、私は霊媒ではない。亡くなった祖父母の声が聞こえたり、姿が見えたりすることはあるが、霊が来ているというより、生きていた頃の様子をもとに、脳内で勝手に創り出しているだけだと思っている。ましてや他者に関係する死者の霊など、見たことも聞いたこともない。それでも講座では、何か言わなくてはならない。だから初日は、頭の中に適当に浮かんだ、黒い石のブレスレットをつけて、小さくはない白い犬を連れた背の高い男性と、赤いベレー帽をかぶってブルドッグのような顔をした男性が、仕事の後や週末にパブでビリヤードをしている、というイメージを口にした。すると私とペアになった相手は、初めの男性はおそらく父、黒いブレスレットをしていて、白い犬を飼っていたが、小さい犬だった、と言う。もう1人はおそらくおじ。2人はビリヤードではないが、よく週末にサッカーをしていたそうだ。そこそこの年齢の人で、犬か猫を飼っていると言えば、誰かには当てはまると考えてくれるだろうとは思っていたが、まさにその通りになった。

そのため、翌日は心当たりのある人が少なそうな子供のイメージを伝えることにした。幼少時に入浴中の一酸化炭素中毒の事故で亡くなった、4歳年下のはとこが来ていると想像しながら話し始めた。小さな女の子が一人ぼっちで泣いてい

る、大人は大勢歩いているが、親は見当たらない。主催者から何で亡くなったのか尋ねられ、咄嗟に「熱さ」と答える。「発熱？」と訊かれ、またもや咄嗟に「火かお湯」と答えた。案の定、手を挙げる人はなかなかいなかったが、1人の女性が「小学校時代の友人かもしれない」と言った。主催者は「親密な関係でない場合、誰だかわからないことも多い」と言って、次に進んだ。

その直後、自分がとんでもない誤解をしていたことに気づく。コミュニケーションをとるべきだった霊は、その場にいた誰かの知り合いの霊である。それなのに、死因を誤って伝えていたうえ、自分の親戚の霊が来ている様子を思い浮かべていたのだから、その霊を他の人が認識できるわけがなかったのだ。

なお、どちらの日も、自分が死者の霊とコミュニケーションをとっている感覚は全くなかった。それにもかかわらず、この場にいた人たちは、私が「見た」と口にしたイメージを信頼して、あれこれと考えてくれたのである。心当たりのある対象者がいないのは、私の霊媒としての経験が未熟だからではなく、霊媒としての私が見聞きしたことは絶対に正しい、その場にいる誰かが気づいていないだけという前提のもと、進んでいったのである。

4.2.3 サークルの役割

オープンなサークルでは、参加者がヴィジョンやメッセージを得る際に霊を意識している様子はなく、それらがどこから来ているかについて言及されることはなかった。霊媒たちは霊から来ていると考えていたが、オープンなサークルは霊媒としての訓練というより、その前段階として直感力を鍛えることが目的であるからだと思われる。逆にクローズドなサークルではメッセージは霊から来るとされて、霊の存在を意識させられるようだ。

オープンなサークルの瞑想後に発言する際、初心者は「私は～だと思ふ」のように、自分が主語になる話し方をすることが多かった。「思ふ」という言い方からは、自分が得たヴィジョンやメッセージの正しさに対する自信のなさが感じられる。一方で、サークルの主催者などの熟練者は「私は～を感じる」というように、応対している霊から感覚を得ているような発言や、「○○は～と言っている」とメッセージを受けた霊を主語にした発言が目立った。霊媒が霊の代理人として話すような語法は、デモンストレーション中の霊媒の多くからも聞かれた。

ヴィジョンやメッセージを得ることは1人でもできるかもしれない。しかし、興味関心を同じくする人たちが集うサークルという場に参加すれば、得られたヴィジョンやメッセージの理解や表現の仕方を互いに学ぶことができる。それがまた、ヴィジョンやメッセージをより詳しく得る開発につながっていく。そして、得たヴィジョンやメッセージは必ず正しいと肯定してもらえるので、自信をもつこともできる。3.3では霊媒が言ったことに心当たりがなくても、それはその人が知らないだけだと理解されている、と述べた。デモンストレーション中のこの自信は、サークルの仲間たちからの肯定に下支えされているのではないだろうか。

4.3 霊との接触を制御

大半の霊媒は霊と四六時中会っているわけではなく、霊媒の仕事をするときとしないときを分けている。そのため、買い物中に通りを歩く誰かの知り合いの霊を見るということは滅多に起こらない。しかし、エディンバラに暮らすマシューが「99%の時間は自分自身を制御できるが、望まないタイミングで霊が入ってくることもある」、先述のレベッカが「たまに誰かの霊に出会ってしまい、その霊から生者へのメッセージを伝えたいという強い衝動に駆られる」と語ったように、期せずして出会ってしまうこともある。

ここでは、接触の制御や予期せぬ接触を、霊媒はどのように捉え、対処しようとしているのか見ていく。

4.3.1 切り替えと訓練

出会う、出会わないという切り替えについて、霊媒たちは「門番〔としてのスピリットガイド〕がドアを開けたり閉めたりして、霊媒のところに来ることを許された霊だけを通す。開閉を学ぶため、良いサークルを見つける必要がある」(ニーナとフェイ)、「サークルでは心をドアのように開いたり、閉じたりすることを学ぶ」(マシュー)、「オン、オフ。スイッチを入れたり、切ったり」(シェリー)というように、ドアやスイッチのたとえを用いて表現する。そして、切り替えの訓練はサークルで行われている。

そのため、サークルにはたまに、霊が制御できずに困っている人がやってくる。私も2024年、ロンドンのあるオープンなサークルでそういう人に遭遇したことが

ある。

その若い男性は明らかに落ち着きがなかった。参加費が現金でしか払えないことに繰り返し文句を言い、「自分には〔週〕7日間,〔1日〕24時間,霊からの声が聞こえている。〇〇〔別の心靈主義者教会〕に行ったが,何の役にも立たずここに来たんだ」と騒々しく話す。

瞑想中も大きな音を立てて咳き込んだり,鼻息を荒くして息を吸ったり吐いたり。「配られたオラクルカードを見て,霊からの言葉を3つ言って」と主催者に言われても,黙っているだけで何も言わないし,促されると,「カードなんてなくても,〔週〕7日間,〔1日〕24時間,いつでも聞こえるんだ」と全く話がかみ合わない。参加者の1人が「アドバイスをしてもいいかな」と前置きをしたうえで,「黒いものではなく,白いものを身につけると良い。特に白い帽子。振動を変えられるよ」と言っても,この若者は「無理だ」とごねる。

隣の席の私には迷惑でしかなかったが,2人いた主催者は「君を助けない」と何度も伝える。チャクラの閉じ方を小部屋で学ぼう,ということになり,彼は主催者の1人と別の部屋に移った。サークルの終わりがけ,部屋から出てきたときには,若者も少し落ち着いているように見えた。この事例からは,サークルが霊の制御ができず,生活に支障をきたしている人の駆け込み寺にもなっている様子が窺える。サークルは霊との適切な付き合い方も学べる場なのである。

4.3.2 「憑依」という状態

霊媒たちは口をそろえて,「霊媒術は憑依ではない」と断言する。メンタル霊媒は,そもそも霊を身体に入れないとされているが,身体に霊を入れるトランス霊媒であっても,憑依とは違うときっぱり言う。例えばジョージによれば,トランス霊媒に入ってくる霊は「スピリットガイドか高次の意識をもつ存在」であるのに対して,憑依する霊は「意識が低く,気難しい」。

またシェリーは「憑依とは,歓迎されない霊が誰かのエネルギーに入り,徐々に制御するようになること。そういった霊の多くは地球から離れたくないとしがみついている,振動が低い」と話し,そのため「霊媒は自分の振動を高く保つよう,振動を下げるアルコールやドラッグは避け,ポジティブで健康的な生活を送るようにしなくてはならない」と語った。ここでいう「振動(vibration)」とは,

その人の霊的なエネルギーの周波数のようなものである。

人であれ、霊であれ、周波数の近い者同士がつながることができるため、振動を常に高く保っていないと、高い振動の霊（良い霊）とつながることができず、振動の低い霊に憑依されるのである。良い霊と悪い霊を、高い、低いという形容詞で説明する点は、ジョージもシェリーも共通している。

霊媒が関わる霊は、霊が来たいとき、あるいは霊媒が許可したときにだけ来る存在だと考えられており、相互の意志疎通が可能だとされている。逆に憑依とは、その人の意志に関わらず霊が勝手にやってきて身体に入り込んでしまうことであり、こういった霊とは対話ができないと考えられている。

霊媒たちと対話しているうちに、彼らが「憑依」という現象を非常に恐れていることに気づいた。私はインタビューの中で必ず「霊媒術は、憑依とは違いますよね」と質問したのだが、皆が皆、聞きたくもない言葉を聞いてしまったというように、さっと表情を変え、語感を荒げて、「ノーウ (No) !」と強く否定したのだ。

憑依に対する強烈な否定は、同じくイギリスで出会った、女神を身体に降ろす実践をする人々の間でもみられた (河西 2022)。観察からもインタビューからも、女神を「憑依」しているとしか思えなかったのだが、彼女たちは *possession* という言葉を避け、*embodiment* や *aspecting* という言葉を使用していた。

憑依の研究に基づき、非西欧と近代西欧の人間像が異なっていることを指摘した石井によれば (1.2 参照)、アフリカ・ガーナのアカンの人々にとってのアコム (*akom*, アカン語で憑依) や日本語の「憑依」という言葉は、「超自然的なものと人間の融即的な合一を表現している」(石井 2007: 253)。その一方で、英語のポゼッション (*possession*) は、超自然的な存在による自己の占有であり、つまり自己に対する支配・占有権の喪失、主体性の危機を意味する (石井 2007: 252)。この解釈に従えば、英語を母語とする霊媒たちにとって、憑依とは自己を制御できなくなる逸脱状態である。

霊媒たちは霊媒行為を憑依から明確に区別する。そうすることで、霊媒行為は、身体を乗っ取られるわけではないし、主体性を失うわけでもない実践と理解し、霊媒という行為の異常性を減じることができる。憑依と認めない言説には、霊媒術を心理的に受け入れやすくする効果があると考えられる。

4.4 霊の知覚

Gilbert (2008) はイメージに焦点を当てているが、私が調査で出会った霊媒たちは特定の霊の存在と霊からのメッセージを、人の姿などのイメージがはっきりと見えること (clairvoyance, 透視力), 声をはっきり聞こえること (clairaudience, 透聴力), 痛みや冷感, 匂いや味などを感じること (clairsentience, 透感力・超感覚) を通して, 知ると語った。複数の能力をもつと言う霊媒もいた。さらに, それぞれの知覚は, 通常の知覚のように「客観的に (objectively)」知覚する場合と, 頭や心の中で「主観的に (subjectively)」知覚する場合があると考えられていた。

霊媒で心理療法士の P. Emmons と社会学者で人類学者の C. F. Emmons というアメリカ人の夫妻が, 98 人の霊媒に行ったインタビューに基づく研究によると, そのうち 72% が透視力, 66% が透聴力, 42% が透感力をもつと答え, 最も優位と考えている能力もこの順で多かった (Emmons and Emmons 2003: 242–243)。私がインタビューをした霊媒のうち, 霊の知覚について語ってくれた人は 15 人おり, そのうち少なくとも 13 人が透視力, 10 人が透聴力, 8 人が透感力をもつと答えた。優位な能力としては, 透視力が 4 人, 透聴力が 2 人であり, 過半数は優位な能力を挙げなかった。この結果は Emmons らの調査と類似している³²⁾。感覚の人類学においては, 西洋近代社会では視覚, 次いで聴覚が優位な感覚とされてきたことが指摘されているが (Howes 2003; Howes and Classen 2014), 霊媒たちが霊とコミュニケーションをとる能力にも同様の傾向があることがわかる。

以下では, それぞれの能力がどのようなものと理解されているのか, 詳しく見ていく。デモンストレーションの参与観察だけでは, どのような能力を使って存在を知覚しているのかはわかりづらいので, ここでもインタビューに基づいて分析を進める。

4.4.1 透視力

透視力について, エイミーは次のように話す。

〔透視力は〕主観的なこともあれば, 心の外にあるような客観的なこともある。このイメージから霊である人を知る。その人が何かをしている姿のほか,

外見、身長、体重、着ているものを見るかもしれない。リーディングをしている目の前の人〔＝プライベート・セッションのクライアント〕が生活の中ですべきことのイメージが見えるかもしれない。イメージは誰かの魂や人生を象徴するもの。象徴は様々な形で表れる。例えば、牢獄のイメージを見たときには、誰かが自分の心の牢獄に閉じ込められている気がしているのかもしれない。新しい始まりの象徴である扉が開くのが見えるかもしれない。ある人の人生の様々な段階を示す書籍の章を見るかもしれない。霊媒は、霊たちが送る象徴的なイメージを受け取る存在である。

ここからわかることは、霊媒が見ているイメージは、死者の霊の姿だけでなく、死者の霊と関係するその場にいる生者の姿や人ではないイメージも含まれるということである。人ではないイメージの場合、霊媒はそのイメージを解釈して、その場にいる生者に伝える必要がある。これらのイメージは全て霊から来るとされているが、イメージの解釈が違くと、その場の生者には「心当たりがない」ことになり、別の角度から解釈をし直すことになる。

ニーナとフェイは、いつも2人で霊媒をやっている。主観的な透視と客観的な透視について、2人は以下のように説明した。

ニーナは「私は人生で3～4回しか客観的に霊を見たことがなく、ほとんどが主観的」と言う。フェイも頷き、「客観的に見るためには、とても大きなエネルギーが必要だから、今ではこういうことはそんなに起こらない。霊媒はかつてより速く働き、より詳細で多くのメッセージを得るようになっている」と続ける。2人は、今は客観的にイメージを見ることは珍しい、と述べる。さらにフェイは「客観的に見えるとは、自分と話している相手を見るようなもの。主観的に見えるとは、心の目で相手を見るようなもの」と説明した。

2人は一般的な霊の見え方が通常の見え方とは異なっていることを、客観的、主観的という言葉を用いて説明している。時代の変化に伴い、見え方が客観的から主観的へと変化したと考えている様子が窺える。

4.4.2 透聴力

それでは透聴力についてはどうだろうか。ジョージは次のように語った。

私は霊が見える透視者でもあるが、主には霊が聞こえる透聴者だ。霊たちは私に話しかけてくる。霊媒の多くはテレパシーで心の中で聞いている。私は時々、実際に聞こえたり話したりするが、こういう霊媒は稀。〔霊たちは私が応対している生者の〕名前や日付を教えてくれる。

ジョージは主観的、客観的という言葉は使わないが、ニーナやフェイ、エイミーと同様、心の中で聞こえることと、心の外で人間同士のように聞こえることを区別している。霊媒たちは「霊を聴く (listen)」より、「霊が聞こえる (hear)」を圧倒的によく使う。心して聴くというより、ただ聞こえてくるのだろう。また、一方的に聞こえてくるだけではなく、双方向的に会話もしている。なお、3.3でも記したように、「日付」とは普通、誕生日、記念日、命日などではないかと問われたり、未来に重要となる日だと伝えられたりする月日や時期のことである。

シェリーは、通常は心の中で主観的に聞こえているが、心の外で客観的に聞くこともある。

時々、名前や日付などの叫び声を得る。客観的に聞こえると、「おお!」と思う。透聴力の場合、聞こえるから間違えない。聞いたことを繰り返すだけ。〔透視力は〕とても速いが、扱いにくい。〔霊が来た人は〕霊たちから見せられた絵やイメージの意味を解こうとし、私は自分の考えを伝える。だから、メンタル霊媒術は難しく、多くの訓練と練習が必要。

透視力で得られたメッセージの場合、霊媒が解釈する必要がある。しかし透聴力の場合、来たメッセージをそのまま言葉で伝えれば良いので、霊からのメッセージはより正確に伝わる。だからシェリーは、メッセージの伝達には透聴力が最適と考えているのだ。

4.4.3 透感力

透感力として得ている感覚は様々だ。インタビューに応じてくれた霊媒の場合、痛みと冷感と触感が各2人、熱と匂いが各1人だった。なお、味を感じる霊媒も少ないが、いるようだ。

「痛みがある場合、自分も腕や膝など、同じところが痛む」というように、霊が生きていた頃を感じた痛みや、霊がやってきた生者が感じている痛みを、霊媒も感じるとされる。たばこや花など、その霊が好きな物の匂いは、生者がその霊を思い出すきっかけになるようだ。「私はヒーラーだから、手が熱くなると、今日〔サービスをしている〕この部屋にヒーリングが必要な人がいるとわかる」というように、熱を霊から自分へのメッセージとして捉えていた霊媒もいた。

冷感と触感は、いずれも霊がそこにいる証拠だと理解されていた。先述のカレンは次のように話した。

〔その日〕初めて霊たちとつながったとき、心を開いて霊たちと話し始めたとき、〔スピリット〕ガイドに「あなたがそこにいます、知らせてください」と言う。私の〔スピリット〕ガイドは私の肩を押す。鼻をむずむずさせたり、耳の上に乗ってきたり、そよ風のように優しく顔に触れるかもしれない。

触れる感覚により、彼女は霊の来訪を知る。

冷感を得る霊媒もいる。シェリーは次のように話す。

私の場合、霊の世界が近づくと、霊たちは振動し、大気に乱れを起こし、その波を私は冷たい息として顔に感じる。私は冷たく感じるが、熱を感じる人もいるし、ぴりぴりする人もいる。霊の世界とつながっている印だ。

エリスが冷感を感じるのは、霊とつながりたいときだけではないようだ。

霊がやってくる時、時々寒を感じる。霊の人の振動はとても速いから、彼らを冷たく感じるのだと考えている。知らない人は「ちょっと寒い」と思うかもしれないが、私は誰かがいると思う。実際、頭の上を通り抜けたこと

もあった。バースの18世紀からのファッションの店が立ち並ぶ通路を歩いていたとき、誰かが通り抜ける奇妙な感覚があった。18世紀より前の時代の幽霊だったのかも。

誰かの知り合いの死者の霊とは異なり、幽霊は死後の世界に行くことができず、こちらの世界でさまよっている存在だと、霊媒たちの間では考えられている。その幽霊が傍を通ったとき、エリスは冷感がしたと考えているのである。

視覚や聴覚に比べ、触覚、温覚、冷覚、痛覚、嗅覚といった感覚が提供する情報量は少ない。視覚や聴覚の補完として使われているといえよう。

4.4.4 霊を知覚する能力

霊媒たちは霊を知覚するとき、見える、聞こえる、感じるといった普通の人間がもっている感覚を用いている。しかし、視覚と聴覚については、直接見たり聞こえたりするだけではなく、心の中で見えたり聞いたりもしていて、後者の方がよく起こっている。前者の場合でも、霊媒にしか見えないし聞こえていない。

かつて盛んだったフィジカル霊媒の場合、霊媒本人だけでなく、聴衆にも何かが見えたり聞こえたりしていた。しかし、現代に主流のメンタル霊媒の場合、霊媒本人以外が知覚することは不可能で、証明する手立てはない。霊媒が知覚したことは正しいと信じるしかないのである。

とはいえ、メンタル霊媒たちは、自分たちが他の人にはない特別な能力をもっているとは考えていない。例えば、ブリストルのある心霊主義者教会で壇上に立った霊媒は、デモンストレーションを始める前に、「サークルで訓練すれば、誰でも霊媒になれるのです」と前置きをし、自分は特別な存在ではないことを匂わせた。霊媒でもあるウィルソン博士に、霊媒には誰でもなれると思うか尋ねたところ、「霊媒の能力はピアノやフルートと同じだと思う。楽しむ人もいるし、キャリアにする人もいるし、天才もいる」という答えが返ってきた。楽器の演奏と同じく、霊との交流に非常に優れている人もいるが、そこそこの人もいるし、あまり得意でない人もいる。能力はあっても興味がなく、訓練をしないので、開発されない人もいる。彼は「生まれつきの能力もあるけれど、[サークルの]先生にも左右される」と付け足す。霊媒の能力が開花するかは、もともとの資質もあるが、本人

のやる気と指導者の力量の影響も大きいと言うのである。

E. Garrett (1893–1970) という 20 世紀の有名な霊媒は、高い透視力をもつことで知られていた。彼女は「この能力は超感覚的あるいは異常な知覚ではなく、むしろ、触覚、味覚、嗅覚、視覚、聴覚の五感の活動が強化され、洗練されたことによるものであり、それらが組み合わされて、ほとんどの人が到達することのない、より高い意識の高さまで運ばれているにすぎないと考えている」(Garrett 1939: 199) と述べていて、霊媒の能力は特殊な能力ではなく、万人に備わっている知覚が開発された結果だと考えていることがわかる。

メンタル霊媒は特殊な人々ではないという言説は、誰がメンタル霊媒になっても不思議ではないという考え方を支えているといえる³³⁾。

5 結論

本章では、霊媒たちはいかにして霊を知覚していると考えているのか、霊の知覚という「異常」な状況をなぜ受け入れられるのか、現代の心霊主義は超自然的存在との交流と知覚に関するこれまでの研究の中でどのように位置づけられるのか、について考察していく。

5.1 霊の知覚の仕方

霊媒たちは、霊を見て聞いて、痛みや温度、匂いや触り心地といった日常的にも用いている感覚を通して、霊がその場にいることを知り、やり取りをしていると考えている。こうした知覚には、脳内で見えたり、聞こえたり、感じたりする主観的な知覚と、通常知覚のように見えたり、聞こえたり、感じたりする客観的な知覚がある、とされている。2 種類の知覚があることは、現代の心霊主義を対象とした研究でも、非西欧社会を対象としてきた先行研究でも、十分に指摘されてこなかった点である。

繰り返し頭の中でイメージを創り出すというサークルでの訓練は、Noll (1985) のシャーマン、及び Luhrmann (2012; 2020) のペンテコステ派や福音主義のキリスト教徒の心的イメージの生成と似ている。心霊主義の霊媒の場合、シャーマニズムや憑依の先行研究 (島村 2011, 2022, 2024; ハーナー 1989; 松平 2024; Harvey

1998) で指摘されてきたような、霊と交流できる状態へと導くような音や振動、リズムなどの外部からの刺激はなく、アルコールや幻覚剤も摂取しない。瞑想と祈りという静かな状態のみを経て、霊を知覚できる状態となる。つまり、外部からの刺激がなくても、霊媒たちは霊を知覚できる状態へと移行している可能性を指摘できる。また、異言を発することもなく、霊媒と霊や聴衆とのやり取りの様子は、通常の間人同士の会話の様子とあまり変わらない。

Hume (2007: 14) は、禅の瞑想のような「過度の弛緩」という副交感神経系の変化が意識の変容を引き起こすことを示唆しているが、個人で完結する禅の瞑想とは異なり、近代西欧の霊媒たちは超自然的存在と交流し、そのメッセージを聴衆に伝えている。外部刺激の有無とやり取りの際の様子は異なるが、ある特定の状態を経て、超自然的存在からのメッセージを伝えるという状況は、シャーマニズムや憑依の先行研究が明らかにしてきた状況と似ている。

内的で静かな状態が霊媒たちに変容をもたらし、普段の間人同士の会話のように霊とやり取りを行っている背景としては、例えば、外部からの刺激によって通常とは異なる意識状態になり、通常とは違う振る舞いをして超自然的存在と交流することが、社会的に好ましくないとされてきた可能性が考えられる。しかし、これまでの調査から得られたデータでは、これ以上の考察を進めることは難しく、いずれ機会があれば検討したい。

5.2 霊を知覚する自分を受け入れられる背景

霊媒たちの霊の知覚の仕方は、空耳、空想、気のせいと理解されても、仕方のない状況である。それなのに、霊媒たちが霊を知覚している自分を受け入れられる理由は3点あると思われる。

まず、サークルでの仲間の霊媒や、デモンストレーションにおける常連の聴衆といった周囲が肯定し、励ましてくれるからである。大人になってから初めて、霊と交流するようになった人たちは、霊的な事柄や、普通には起こりそうにない出来事が肯定されやすい環境に身を置いていた。子供の頃から霊の存在に気づいていた霊媒たちも、仲間に出会う前は、周囲の否定的な態度や理解の不足により、自分が霊と交流していることに確信を得られていない。しかし、サークルでは「絶対に間違いない」「自分を信じて」と繰り返し言われるので、確信を深めていく。

さらに、デモンストレーションの場でも、とりわけ常連の聴衆は霊媒を否定せず、思い当たるふしがなくても、「留めておきます」などと伝え、受け止めてくれる。このような他者との交流が、霊を知覚しているという自信を与えていると思われる。

この点は Gilbert (2008) も指摘しているのだが、本節ではさらに2点指摘したい。1つは霊との接触は制御できる、つまり自分で決められると考えている点である。そしてサークルという、制御を身に着ける場まで用意されている。また、制御不能とされる憑依とは明確に区別されている。何者かに身体を乗っ取られるような受動的な実践ではなく、主体性は保持され、霊も制御できる能動的な実践だと提示されることで、霊媒であることを受け入れやすくなっていると考えられる。

もう1つは霊媒になる人は特別ではなく、誰もが霊媒になれる可能性を秘めている、という言葉である。Noll (1985; 2019) は心的イメージの創り出しやすさには個人差があること、訓練は有効であることを示唆しているが、霊媒も同様である。誰もが霊を知覚できる可能性があるのだから、自分にできてもおかしくないという論理だ。

さて、霊媒が霊を知覚している自分を受け入れるということは、霊媒になるということである。ここで示した霊媒たちが霊媒になる過程は、1.2で提示した、佐々木による非西欧社会の調査に基づくシャーマンの成巫過程に当てはまるか、検討したい。霊媒たちは霊から霊媒になることを求められるわけではなく、周囲の人々と能力を開発していく中で、霊媒としての自分を受け入れていく。この点は召命型というよりは修行型である。しかし、修行すれば誰でもなれるわけではない。また、4.1.3で示したように女性親族に同様の能力があると答えた人は少なからずいたが、世襲と捉えられているわけではなかった。つまり、佐々木による成巫過程との共通点もあるが、近代西欧が理想とする「自律的な個人」のあり方がより重視されているといえる。

5.3 心霊主義の霊媒たちの位置づけ

最後に、超自然的存在の文化人類学的研究の中に、現代の心霊主義の霊媒を位置づける。

人間が訓練を経て、霊と出会うようになるという心霊主義の霊媒たちの実践は、シャーマンたちの実践と似ている。しかしながら違いもある。まず、太鼓や歌、アルコールや幻覚剤という外からの刺激は使わず、瞑想や祈りという静かな実践によって、自らを霊たちと出会う状態にもっていく。これは、外からの刺激がなくても、超自然的存在と交流できる宗教実践の1つだといえる。

霊媒たちは霊を身体に降ろすことはなく、霊と自分は身体的にも人格的にも別の存在であることを前提として、霊と交流している。また、霊たちと交流していると同時に、聴衆ともメッセージの伝達を通して交流している。自分の意識や主体性を失うことなく、死者の霊と生きた人間に相対しているのである。これは2つのパラレルな世界に同時に存在している状況で、2つの世界のまさに媒介者（ミディウム）としての役割を果たしているといえよう。

5.4 残された課題

最後に、本稿では明らかにできなかった課題を述べる。1点目は、メンタル霊媒以外の霊媒、つまりフィジカル霊媒やトランス霊媒の調査が十分でないため、分析も不十分である。とりわけトランス霊媒の実践は、非西欧社会において研究されてきた憑依やシャーマニズムと近いが、メンタル霊媒と同様、瞑想という静かな実践によってトランスに入っており、本稿では十分に明らかにできなかった、過度な弛緩が非日常的な体験を導く背景について、より深く迫れると考えている。

本稿では霊媒とその行為に焦点を当てたため、十分に取り上げることができなかったが、超自然的存在からのメッセージを伝えるという非合理的な実践が、現代のイギリス社会（あるいは近代西欧）に残っている理由を探ることが、2点目である。これまで指摘されてきたように、親しい人の死の受け入れ、女性の活躍の場の提供以外にも理由はないのだろうか。検討の際には、霊媒だけでなく、1970年頃から増え始めたサイキックやチャネラーを名乗る人々にも注目する必要があると思われる。サイキックとは、霊媒と似ているが、直感に優れた人のことである。チャネラーとは、霊媒のニューエイジ的な呼称で、多くは心霊主義者教会とは関係なく独立して活動している。心霊主義の霊媒より消費文化との親和性があり、死者の霊ではなく、神々や天使、地球外生命体からのメッセージを伝える傾向にあると指摘されている（Spencer 2001: 350, 356）。またラーマンは、霊媒でも

チャネラーでもないが、目に見えない存在からの「声」が聞こえる人々の分析をしている (2024a; 2024b)。このような人々を訪れるクライアントの調査もすることで、近代西欧の超自然的存在との交流である霊媒行為がもつ、新たな社会的役割を明らかにできると思われる。

3点目は、心霊主義のヒーリングとヒーラーたちである。ヒーリングとは、神からのエネルギーを霊媒を通して必要な人に送るという呪術的な実践で、心霊主義以外の場でも盛んに実施されている。この調査と分析も行うことで、近代西欧における超常的な現象に関して、より多角的かつ包括的な研究を行うことができるだろう。

心霊主義の霊媒術をはじめとする超常的な現象の実践は、現代のイギリスでも比較的行われているが、現地調査に基づく実証的な研究は十分に行われていない。このような実践は、シャーマニズムや呪術の研究と接合させることで、他の地域の類似事例と合わせて検討できる可能性がある。そのため、残された課題に取り組みつつ、今後とも超自然的存在と交流する人々や超常的な現象に関わる人々の研究を続けていきたい。

謝 辞

イギリスの心霊主義については、2023年と2024年のCESNUR (Centro Studi sulle Nuove Religioni, 新宗教研究センター) で口頭発表を行い、本研究を進めていくうえで有意義な多くの助言をいただきました (2023年の発表は (河西 2023b) として発表)。オープン大学の M. ボウマン教授、独立研究者の D. ウィルソン博士も、快く相談に乗っていただきました。これまでの調査で出会った方々も、心霊主義について思うところを自由にお話いただきました。ロンドン調査は、滞在先の友人のおかげで可能になりました。何より、霊媒の皆様や心霊主義者教会の方々には、大変お世話になりました。本研究は、科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「現代のイングランドにおける霊媒師の実践とその変貌に関する研究」 (課題番号 JP22K00083) の成果です。

付記 登場人物一覧 ※研究者であるウィルソン博士を除いて仮名

【霊媒】

性別	年代	出身地	居住地	筆者と知り合ったきっかけなど	インタビューなど実施年月日	
ウィルソン博士	男	50代	エディンバラ	グリストル	筆者の知り合いの研究者の知人	2023年8月11日インタビュー
エイミー	女	50代	アイルランド	ウェールズ	著者の友人の友人	2023年10月24日インタビュー (Zoom)
エリス	女	60代	プリストル	プリストル	プリストルで有名な霊媒 デモンストレーション参加時に知り合う	2023年8月6日インタビュー, 2023年8月27日プライベート・セッション それ以外にも何度か会話
カレン	女	50代	不明	ロンドン	ボールの友人	2024年6月27日インタビュー
キャロル	女	40代	ミッドランド	ミッドランド	ある店で偶然、知り合う	2024年5月21日インタビュー
シェリー	女	40代	ロンドン	グラストンベリー	グラストンベリーのフリーペーパーを通して知り合う	2024年6月4日インタビュー
ジョージ	男	70代	北西部	デヴォン州	著者の友人ヴィオラの夫	2023年9月9日インタビュー, それ以外にも何度か会話
ゾーイ	女	70代	ロンドン	グラストンベリー	トランス霊媒、著者の20年来の友人	2022年9月21日インタビュー, 2023年8月29日プライベート・セッション
ドルー	男	70代	アイルランド	ロンドン	サービス参加時に知り合う	2024年7月18日インタビュー (Zoom)
ニーナ	女	70代	エディンバラ	エディンバラ	ウィルソン博士の友人、ハロルドと同じ教会に通う	2023年9月6日インタビュー
フェイ	女	70代	エディンバラ	エディンバラ	霊媒行為は普通、2人で行う	2023年9月6日インタビュー
バッキー	女	50代	プリストル	プリストル	エリスの友人	2024年6月23日インタビュー
マシュー	男	70代	スコットランド	エディンバラ	ウィルソン博士の友人	2023年11月10日インタビュー (Zoom)
レベッカ	女	70代	不明	ロンドン	ボールの友人	2024年6月26日インタビューと プライベート・セッション

【霊媒ではなく常連】

性別	年代	出身地	居住地	筆者と知り合ったきっかけなど	インタビューなど実施年月日	
イザベル	女	60代	ロンドン近郊	グラストンベリー	筆者のグラストンベリー調査中の下宿先	2022年9月自宅に滞在
ハロルド	男	70代	グラスゴー	エディンバラ	ボウマン教授の友人、ウィルソン博士の友人	2023年9月4日～5日に会話
ポール	男	70代	ミッドランド	ロンドン	サークル参加時に知り合う	2024年5月15日インタビュー, それ以外にも何度か会話

注

- 1) 調査で見聞きした限り、心霊主義者は「死ぬ」という言葉を使わない。代わりに「霊の世界への移動 (passing)」「物理的世界を永遠に後にする」「永遠の眠りにつく」などと言う。
- 2) 霊媒である妻と心霊主義者教会を始めるため、売りに出されていた建物を買おうとしたところ、目的を知った売りに売却を断られたという話を、妻の付き添いで心霊主義者教会に来ていた男性から聞いたことがある。これは心霊主義者教会を始める前の段階で妨害を受けたケースだが、死者と交流するという考え方を好まない人々は、そもそもすでにある心霊主義者教会周辺の家には住まないから、苦情も出てこない、とも考えられる。なお、心霊主義の実践は静かで、騒音問題が発生しないことも受け入れられている1つの要因だと思われる。
- 3) 心霊主義の発祥はアメリカだが、イギリスでより根づいた (三浦 2008: 211-214)。そのことが研究対象地域の偏りにも表れていると考えられる。
- 4) Luhrmann のこの業績は、多くの研究者の間で好意的に受容されているが、調査に協力した魔女や魔術師たちは、調査者であることを明かさず、自分たちの信仰を非合理的と決めつけた彼女に激怒した。そのため、後に続いた魔女研究者たちは調査を受け入れてもらうことに苦しし、確認した限り全ての現代魔女の民族誌の冒頭において、Luhrmann は批判されている。
- 5) 西洋近代においては視覚、次いで聴覚が優位に用いられてきたという批判に基づき、それ以外の感覚を積極的に民族誌記述に取り入れる「感覚の人類学」が提唱されてきた (cf. Howes 2003; Howes and Classen 2014; Pink 2009)。Hume の研究はその1つとしても捉えられる。
- 6) 文化人類学者の川田牧人、白川千尋、飯田卓や、宗教学者の G. Harvey と J. Hughes も、宗教実践における感覚に関する論集を近年、刊行している (川田・白川・飯田編 2020; Harvey and Hughes 2018)。
- 7) 調査は 2024 年 5 月～6 月にかけて実施した。「ロンドン」の範囲は、教会の住所に London と入っているかどうかで決めた。心霊主義者全国協会 (The Spiritualists' National Union, 略称 SNU) の教会リストのほか、心霊主義の雑誌 *Psychic News* や講座などを提供する *British Psychic & Medium Association* に掲載された教会一覧を参考にした。また、Google マップでロンドンを表示させ、「Spiritualist Church」と入力して見つけた教会もある。実際に活動しているかどうかの確認には、その教会のウェブサイトや Facebook などのソーシャルメディアも活用した。インターネット上では存在を確認できたものの、実際に訪れてみると、看板がなかったり、掲示板に活動日時が記されていなかったりするなど、休止中あるいはすでに閉鎖されている様子の教会も、この 25 軒とは別に 3 軒あった。
- 8) 「教会」ではなく「センター」や「協会」と称するところもあるが、活動内容に大きな違いがないため、本稿では区別せず「心霊主義者教会」と表記している。
- 9) 祖父母の代から心霊主義者の家庭に育ち、自身も霊媒で、心霊主義について研究している宗教学者のウィルソン博士との個人的な会話から。
- 10) SNU のウェブサイトの Church というページに埋め込まれた Google マップには、教会がある町に印がつけられていたので、それを数えた (2024 年 9 月 15 日)。ただし、数年前に閉鎖している教会も掲載されていた。つまり、定期的に更新されていない可能性が高く、活動中の正確な教会数はわからないが、300 軒を下回っていると思われる。
- 11) アルファベットや数字が書かれている盤で、使い方は日本の「こっくりさん」と変わらない。手順を誤ると、霊に取りつかれるので非常に危険だとし、多くの霊媒から利用しないように警告されたし、古い自体を禁止している教会もある。この教会でも、霊とのコミュニケーションの仕方を知っている霊媒が一緒にない限り、利用しないように注意を受けた。
- 12) 2024 年 5 月～7 月の調査時点で、1 ポンドは約 200 円だった。当時、スーパーのサンドイッチの値段が約 2～4 ポンド、ロンドンの地下鉄の初乗り料金が 2.8 ポンド (ピーク時)、バス料金が 1.75 ポンドだったので、5 ポンドは安く感じた。
- 13) 日本語では「癒し」と訳されることもあるが、癒しという意味では therapeutic という英語の方が意味は近い。
- 14) 2022 年の調査時にはノウル心霊主義者センター (Knowle Spiritualist Centre) と名乗っていたが、2023 年に運営者の 1 人が亡くなり、他の運営者たちがショックを受け、数か月活動を休止した。活動再開後はノウル心霊主義者教会と名乗っている。
- 15) このグループの主催者エリスは、アメリカを本拠地とする、全国心霊主義者教会協会 (the

National Spiritualist Association of Churches, NSAC) で訓練を受けた。そのため、NSAC の支部だと語るが、NSAC のウェブサイトには掲載されていなかったため、本稿では独立系としている。

- 16) イギリスの国勢調査では宗教を訊かれる。キリスト教, ユダヤ教, イスラーム, 仏教, ヒンドゥー教, シーク教を選ぶか、「その他」を選び、自由回答欄に具体的な名称を記入することになっている。なお、心霊主義者教会に通う人の中には、キリスト教徒を自認し、キリスト教を選ぶ者もいる。そのため、国勢調査には正確な数字が反映されていないとウィルソン博士は考えていた。
- 17) インタビューをする時間がなく、プレゼントしてくれた自伝 (Simmonds 2013: 105) から引用した。
- 18) イギリス社会を調査対象としているイギリス人類学者の K. Fox は、上流階級, 上位中流階級と下位中流階級, 労働者階級を見分けるキーワードとして、次の7つを挙げている (Fox 2004: 75–80)。これを参考にした。

上流階級, 上位中流階級	下位中流階級, 労働者階級
Sorry?	Pardon?
Loo, Lavatory	Toilet
Napkin	Serviette
Lunch	Dinner
Sofa	Settee, Couch
Sitting room	Lounge, Living room
Pudding	Sweet, Afters, Dessert

- 19) 20 世紀の有名な霊媒の 1 人、G. ヒギンソン (1918–1993) はこの街の出身である。彼は SNU の会長を 23 年間 (1970 ~ 1993)、AFC の校長を 13 年間務めた (1979 ~ 1993)。その母親も霊媒で、幼い頃から彼を地元の心霊主義者教会に連れていっていた。
- 20) イギリスの国勢調査のウェブサイトでは、最新の調査に基づく情報以外を探し出すことが非常に困難である。そこで、インターネットで見つけることができた年の人口を記した。ストーク・オン・トレントは 1910 年に 6 つの町が合併してできたため、1901 年の人口は University of Leicester (1904: 75, 170, 186, 260, 356, 406) に記された、6 つの町の人口を合わせた数字である。1958 年の人口は The Local History of Stoke-on-Trent, England (n.d.)、2021 年の人口は Office for National Statistics (2022a) による。
- 21) 2023 年 8 月 12 日、教授のご自宅での会話から。
- 22) ヒーリングを行うヒーラーも、霊媒だとする考え方もある。
- 23) エリスのサークルの参加者は人々が心霊主義者教会を訪れるのは、机の移動を見るためではなく、死者の霊からのメッセージを求めているからだと考えていた。つまり、訪れる人々のニーズに応えた結果、フィジカル霊媒は廃れたと理解していた。
- 24) 動いた理由は不明。指先に力を入れて動かしていた可能性もあるが、私以外に 7 人いた参加者たちは霊が動かしていると信じているようだったし、全員で私を誂ったとも考えにくい。また、写真や動画の撮影を強く勧められたが、インチキなら勧めないと思う。
- 25) イギリスの心霊主義者教会を調査した Wilson (2014: 1–4) も同様の手法を用いている。
- 26) イギリスでは、1 棟の建物を 2 戸以上縦に区切って、複数の世帯が住めるように設計された住宅をよく見かける。平屋, 2 階建て, 3 階建てのいずれも見られ、庭も同じように区切られている。その 1 戸を利用している心霊主義者教会もある、ということ。
- 27) 神の父性 (The Fatherhood of God)、人の兄弟愛 (The Brotherhood of Man)、霊の交わりと天使の務め (The Communion of Spirits and the Ministry of Angels)、人間の魂の永続的存在 (The Continuous Existence of the Human Soul)、個人の責任 (Personal Responsibility)、地上で行ったあらゆる善行と悪行への来世での補償と報復 (Compensation and Retribution Hereafter for all the Good and Evil Deeds done on Earth)、全ての人間の魂に開かれた永遠の進歩 (Eternal Progress Open to Every Human Soul)。19 世紀の有名な霊媒の 1 人、E. H. ブリテン (1823–1899) が提唱したもので、SNU では心霊主義の倫理とされている。初めの 2 つはユダヤ・キリスト教に

由来し、人類と神が家族関係にあることを示している (Tomlinson 2024: 120)。

- 28) 十字架が見られる SNU の教会もある。プリストルのベッドミンスター心霊主義者教会では、壇上の真後ろのステンドグラスに描かれていた (写真 24)。ロンドンで見た 1 軒は、外壁の 2 階部分に取りつけられていた。どちらも取り外しが難しいため、容認されていると思われる。これらの十字架からは、かつては他の SNU の教会にも十字架が掲げられていたことが推測される。



写真 24 十字架が見られる SNU の教会 (2023 年 8 月 6 日, プリストル, 筆者撮影)

- 29) もともと文化人類学者であり、のちにシャーマンになったハーナーは、シャーマンが活動を行う際の意識状態を、シャーマンの意識状態と呼んだ。そのような意識状態に入っていくためには、ドラムやガラガラといった楽器を使用すること、歌も助けになることを指摘している (ハーナー 1989: 95, 102, 108)。
- 30) 「吸収します」とは、そのときの様子を吸い取るように理解し、相手に伝えるという意味だと思われる。
- 31) オラクルカードはタロットと同じく占いに用いられるが、枚数や絵のモチーフに決まりがないため、自由度が高い。1977 年に販売された『秘密のダーキニー・オラクル—タントラ占いのデッキ (Secret Dakini Oracle: A Tantric Divination Decks)』が、最初のオラクルカードとされている (河西 2021: 162)。
- 32) 心の中で知らないはずの出来事や考え方を知ってしまう能力に触れた霊媒たちにも出会った。私が目を通した霊媒たちの自伝にも、Emmons and Emmons (2003) にも出てこなかった、この能力を「透知力 (claircognizance)」と呼ぶ者もいた。しかし、分析できるほど十分な事例を収集できなかったため、本稿では取り上げなかった。
- 33) ただし、本稿ではほとんど触れていないトランス霊媒については、誰でもがなれるわけではないと複数のメンタル霊媒が指摘していたし、トランス霊媒自身もそのように認識していた。

参考文献

〈日本語〉

石井美保

- 2007 『精霊たちのフロンティア—ガーナ南部の開拓移民社会における〈超常現象〉の民族誌』京都：世界思想社。
- 2017 『環世界の人類学—南インドにおける野生・近代・神霊祭祀』京都：京都大学学術出

- 版会。
- エリアーデ, M.
2004 『シャーマニズム——古代的エクスタシー技術 上下』堀一郎訳, 東京: 筑摩書房。
- オープンハイム, J.
1992 『英国心霊主義の抬頭——ヴィクトリア・エドワード朝時代の社会精神史』和田芳久訳, 東京: 工作舎。
- 川田牧人・白川千尋・飯田卓編
2020 『現代世界の呪術——文化人類学的探求』横浜: 春風社。
- 河西瑛里子
2015 『グラストンベリーの女神たち——イギリスのオルタナティヴ・スピリチュアリティの民族誌』京都: 法蔵館。
2021 「グラストンベリーのタロット事情」『ユリイカ 総特集=タロットの世界』53(14): 161-174(2021年12月臨時増刊号)。
2022 「私は女神だ! 欧米の女神運動における女性と身体」石井美保・岩谷彩子・金谷美和・河西瑛里子編『官能の人類学——感覚論的転回を超えて』pp. 39-62, 京都: ナカニシヤ出版。
2023a 「現代のイギリスにおけるヒーラーたちのヒーリング」『FAB』4: 170-187。
2023b 「今日のスピリチュアリズム——イギリスの霊媒たちと交霊会」『現代思想 特集スピリチュアリティの現在』51(12): 82-92(2023年10月号)。
- 佐々木宏幹
1984 『シャーマニズムの人類学』東京: 弘文堂。
1992 『シャーマニズムの世界』東京: 講談社。
- 島村一平
2011 『増殖するシャーマン——モンゴル・ブリアートのシャーマニズムとエスニシティ』横浜: 春風社。
2022 『憑依と抵抗——現代モンゴルにおける宗教とナショナリズム』東京: 晶文社。
2024 「ドラミングからライミングへ——モンゴル・シャーマニズムの『韻の憑依性』」『季刊民族学』188: 28-39。
- 津城寛文
2005 『〈霊〉の探求——近代スピリチュアリズムと宗教学』東京: 春秋社。
- ノル, R.
2019 「不可視の現実をつくるということ」島村一平訳『季刊民族学』167: 86-95。
- ハーナー, M.
1989 『シャーマンへの道——「力」と「癒やし」の入門書』吉福伸逸監修, 高岡よし子訳, 東京: 平河出版社。
- 花潤馨也
2005 『精霊の子供——コモロ諸島における憑依の民族誌』横浜: 春風社。
- 松平勇二
2024 「時空をこえるンビラの旋律——ジンバブエ, ショナの憑依儀礼」『季刊民族学』188: 46-53。
- 三浦清宏
2008 『近代スピリチュアリズムの歴史——心霊研究から超心理学へ』東京: 講談社。
- モートン, L.
2022 『西洋交霊術の歴史』田口未和訳, 東京: 原書房。
- ラーマン, T. M.
2024a 「『声』が聞こえる現象とは何か?——スピリチュアルと統合失調症のあいだの心理人類学〈前編〉」島村一平訳『季刊民族学』188: 70-75。
2024b 「『声』が聞こえる現象とは何か?——スピリチュアルと統合失調症のあいだの心理人類学〈後編〉」島村一平訳『季刊民族学』189: 91-95。
- ルイス, I. M.
1985 『エクスタシーの人類学——憑依とシャーマニズム』平沼孝之訳, 東京: 法政大学出版局。

〈英語〉

- Barbanell, M.
2020[1959] *This Is Spiritualism*. n. p.: Spiritual Truth Press.
- Braude, A.
1989 *Radical Spirits: Spiritualism and Women's Rights in Nineteenth-Century America*.
Bloomington: Indiana University Press.
- Buckland, R.
2004[1993] *Buckland's Book of Spirit Communications*. St. Paul: Llewellyn Publications.
- Davie, G.
1994 *Religion in Britain since 1945: Believing without Belonging*. Oxford and Cambridge:
Blackwell Publishers.
- Emmons, C. F. and P. Emmons
2003 *Guided by Spirit: A Journey into the Mind of the Medium*. Lincoln: Writers Club Press.
- Falcon, K.
2023 *Haunted Britain: Spiritualism, Psychic Research and the Great War*. Manchester: Manchester
University Press.
- Fox, K.
2004 *Watching the English: The Hidden Rules of English Behaviour*. London: Hodder and
Stoughton. (= K. フォックス 2017 『イングリッシュネス—英国人のふるまいの
ルール』北條文緒・香川由紀子訳, 東京: みすず書房)
- Garrett, E. J.
1939 *My Life as a Search for the Meaning of Mediumship*. New York: Oquaga Press.
- Gilbert, H.
2008 *Speaking of Spirits: Representations and Experiences of the Spirit World in British Spirit
Mediumship*. PhD thesis, University of York.
- Harvey, G.
1998 *Shamanism in Britain Today*. *Performance Research* 3(3): 15–24.
- Harvey, G. and J. Hughes (eds.)
2018 *Sensual Religion: Religion and the Five Senses*. Sheffield: Equinox Publishing Ltd.
- Howes, D.
2003 *Sensual Relations: Engaging the Senses in Culture & Social Theory*. Ann Arbor: The University
of Michigan Press.
- Howes, D. and C. Classen
2014 *Ways of Sensing: Understanding the Senses in Society*. London and New York: Routledge.
- Hume, L.
2007 *Portals: Opening Doorways to Other Realities through the Senses*. Oxford and New York: Berg
Publishers.
- Hunter, J.
2011 *Talking with the Spirits: Anthropology and Interpreting Spirit Communications*. *Journal of the
Society for Psychical Research* 75(3): 129–141. (雑誌の目次にはこう記載され、13 頁あ
ることになっているが、実際には 15 頁ある。手元の PDF に頁番号は記されておらず、
正しい頁番号は不明)
- 2013 *Numinous Conversations: Performances and the Manifestation of Spirits in Spirit Possession
Practices*. In A. Voss and W. Rowlandson (eds.) *Daimonic Imagination: Uncanny Intelligence*,
pp. 391–403. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Press. (書籍の目次にはこう記載
され、13 頁あることになっているが、実際には 6 頁しかない。手元の PDF に頁番号
は記されておらず、正しい頁番号は不明)
- 2014 *Mediumship and Folk Models of Mind and Matter*. In J. Hunter and D. Luke (eds.) *Talking with
the Spirits: Ethnographies from between the Worlds*, pp. 99–129. Brisbane: Daily Grail
Publishing.

- Luhrmann, T. M.
 1989 *Persuasions of the Witch's Craft: Ritual Magic in Contemporary England*. Cambridge: Harvard University Press.
 2012 *When God Talks Back: Understanding the American Evangelical Relationship with God*. New York: Alfred A. Knopf.
 2020 *How God Becomes Real: Kindling the Presence of Invisible Others*. Princeton, NJ: Princeton University Press. (= T. M. ラーマン 2024 『リアル・メイキング—いかにして「神」は現実となるのか』 柳澤由美訳, 東京: 慶應義塾大学出版)
- Moore, R. L.
 1977 *In Search of White Crows: Spiritualism, Parapsychology, and American Culture*. New York: Oxford University Press.
- Nelson, G. K.
 1969 *Spiritualism and Society*. London: Routledge & Kegan Paul.
 1972 The Membership of a Cult: The Spiritualists National Union. *Review of Religious Research* 13(3): 170–177.
- Noll, R.
 1985 Mental Imagery Cultivation as a Cultural Phenomenon: The Role of Visions in Shamanism. *Current Anthropology* 26(4): 443–461.
- Pink, S.
 2009 *Doing Sensory Ethnography*. London: Sage Publications.
- Roberts, E.
 2014[1969] *Fifty Years a Medium: The Autobiography of Estelle Roberts* (2nd SDU edition). Croydon: SDU Publications.
- Simmonds, Y. A.
 2013 *Life Begins at Forty*. Peterborough: Book Printing UK.
- Skultans, V.
 1974 *Intimacy and Ritual: A Study of Spiritualism, Mediums and Groups*. London: Routledge & Kegan Paul Ltd.
- Smith, G.
 2014 *The Best of Both Worlds: The Autobiography of the World's Greatest Living Medium*. London: Coronet.
- Spencer, W.
 2001 To Absent Friends: Classical Spiritualist Mediumship and New Age Channelling Compared and Contrasted. *Journal of Contemporary Religion* 16(3): 343–360.
- Stockwell, T.
 2004 *Spirited: Living between Two Worlds- A Top Psychic Medium's Extraordinary Story*. London: Hodder and Stoughton.
- Tomlinson, M.
 2019 How to Speak like a Spirit Medium: Voice and Evidence in Australian Spiritualism. *American Ethnologist* 46(4): 482–494.
 2024 *Speaking with the Dead: An Ethnography of Extrahuman Experience*. Goleta, CA: Punctum Books.
- Wallis, J.
 2001 Continuing Bonds: Relationships between the Living and the Dead within Contemporary Spiritualism. *Mortality* 6(2): 127–145.
- Wilson, D. G.
 2014 *Redefining Shamanisms: Spiritualist Mediums and Other Traditional Shamans as Apprenticeship Outcomes*. London: Bloomsbury Publishing Plc.
- Wooffitt, R.
 2000 Some Properties of the Interactional Organisation of Displays of Paranormal Cognition in Psychic-sitter Interaction. *Sociology* 43: 457–479.
 2001 A Socially Organized Basis for Displays of Cognition: Procedural Orientation to Evidential Turns in Psychic-sitter Interaction. *British Journal of Social Psychology* 40: 545–563.

河西 生者と死者の媒介者

Wooffitt, R. and H. Gilbert

2008 Discourse, Rhetoric, and the Accomplishment of Mediumship in Stage Demonstrations. *Mortality* 13(3): 222–240.

〈ウェブサイト〉

East Hamilton Spiritualist Church

Pioneers of Spiritualism

<http://www.easthamiltonspiritualchurch.net/pioneers-of-spiritualism.html> (accessed September 26, 2024)

The Greater World (GWCSL 公式ウェブサイト)

Home

<https://www.greaterworld.net/> (accessed September 17, 2024)

Harris, D.

n.d. Psychic News: A Long History in a Short Blog! (Updated version)

<https://croydonspiritualistchurch.org.uk/psychic-news-a-long-history-in-a-short-blog/> (accessed September 17, 2024)

Hartland, N.

2020 Which Witch (craft Act) is Which?

<https://archives.blog.parliament.uk/2020/10/28/which-witchcraft-act-is-which/> (accessed September 16, 2024)

The Local History of Stoke-on-Trent, England

n.d. Facts and Figures about Stoke-on-Trent

<https://www.thepotteries.org/sot/index.htm> (accessed September 22, 2024)

NSAC 公式ウェブサイト

Church & Camp Directory

<https://nsac.org/church-and-camp-directory/> (accessed September 25, 2024)

Office for National Statistics (ONS)

2012 2011 Census: Key Statistics for Local Authorities in England and Wales (published 11 December, 2012)

https://www.ons.gov.uk/?uri=/peoplepopulationandcommunity/populationandmigration/populationestimates/datasets/2011censuskeystatisticsforlocalauthoritiesinenglandandwales/r21ewrttableks209ewladv1_tcm77-290705.xls (accessed October 31, 2024)

2022a Census 2021: How the Population Changed in Stoke-on-Trent: Census 2021 (published June 22, 2018)

<https://www.ons.gov.uk/visualisations/censuspopulationchange/E06000021/> (accessed October 31, 2024)

2022b Statistical Bulletin, Religion, England and Wales: Census 2021 (released 29 November, 2022)

<https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/culturalidentity/religion/bulletins/religionenglandandwales/census2021#toc> (accessed October 31, 2024)

SAGB 公式ウェブサイト

Home

<https://www.sagb.org.uk/> (accessed September 17, 2024)

SNU 公式ウェブサイト

Churches

<https://www.snu.org.uk/Pages/Events/Category/churches> (accessed September 17, 2024)

Talking with the Dead

2015 Spirit Trail

<https://www.talkingwiththedead.co.uk/trailmap> (accessed September 21, 2024)

University of Leicester (Special Collections Online)

1904 Kelly's Directory of Staffordshire, 1904

<https://specialcollections.le.ac.uk/digital/collection/p16445coll4/id/127300/rec/1> (accessed October 30, 2024)